日文研

2022年9月　no.67

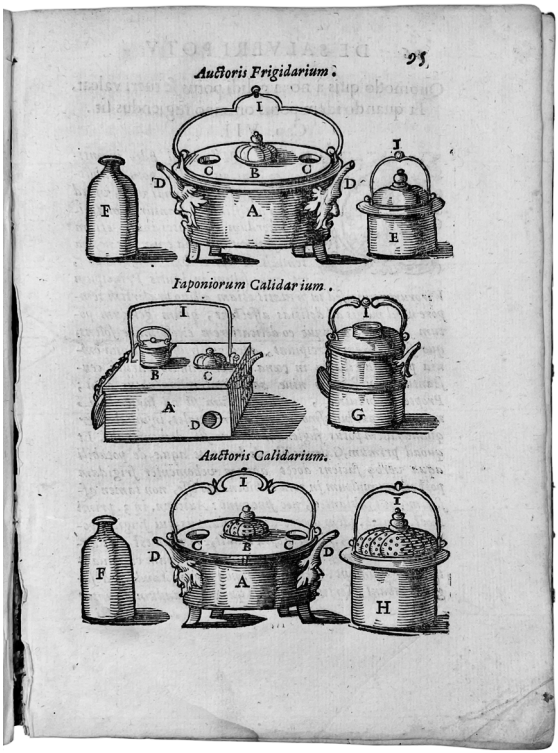
International Research Center for Japanese Studies

国際日本文化研究センター

日文研　六十七

二〇二二年九月

国際日本文化研究センター



スカッキ『健康的飲料論』に掲載された日本製熱燗道具図

今回紹介する図版には三種類の器具が上中下三段に描かれている。このうち中央部分にみられるのは日本の熱燗諸道具である。この図版は、1622年にローマで刊行された『健康的飲料論』に掲載されている。著者のフランシスコ・スカッキは17世紀前半に活躍したイタリアの神学者であり、知識人でもあった。同書でスカッキは、飲料の健康的な飲み方、とりわけ冷やして飲むべきか、それとも温めて飲むべきかについて、古典を引用しながら議論を展開している。その議論の中で興味深いのは、著者が飲料と健康の関係について日本の茶と酒を引き合いに出して論じていることである。同書第2章でスカッキは、日本産の飲料の情報について1615年にローマを訪れた奥州の使節〔慶長遣欧使節・支倉常長〕から直接伝授されたと記し、飲料を適宜に温めたり、冷やしたりする日本人は非常に健康的な国民であると結論づけている。上記図版が掲載されている第六章では飲料の冷却と過熱の方法が解説されている。図版の中央に常長が持参した熱燗諸道具を写し描いた図が配され、日本の道具から著者が着想を得て製作した冷却器具（上）と過熱器具（下）の図がその上下に配されている。

日文研所蔵外書（解説：フレデリック・クレインス教授）

——エッセイ——

荒木　浩　日文研三十五周年、という刻印　2

細川周平　遠隔画面で語る郷愁　4

等松春夫　趣味以上・副業未満—公共音楽研究ことはじめ—　11

森岡優紀　草双紙伝記の世界——西南戦争期の西郷隆盛伝　17

エドワード・ボイル　「記憶の境界」からみる沖縄のいま　24

榎本　渉　コロナの隙をついて調査旅行　31

稲賀繁美　「刹那滅」と「純粋持続」とは輪廻転生／永劫回帰の無限小の「転轍機」、メビウスの帯の表裏をなすのか？——木岡伸夫『瞬間と刹那　ふたつのミュトロギー』（春秋社、二〇二二年二月一五日）を出発点として　38

伊東貴之　「文理」会通の夢——総研大の改革に臨んで　43

（以降は横組み、左綴じ）

共同研究　(1)

基礎領域研究　(19)

彙報　(21)

所員活動一覧　(28)

日文研

エッセイ

日文研三十五周年、という刻印

直木賞は、直木三十五という作家を顕彰して創立されたものだが、この作家は、改名マニアであった。本名「植村宗一」の「植村の植を二分して直木、この時、三十一才なりし故、直木三十一と称す」（「私の略歴」）。そして「三十一から二、三」と改名を続けた。「悪い洒落はよせ」と言われたので「三十三で留めておいたが、三三と重なるのは姓名判断上極悪であるといふ」。そこで「三十三」から「一躍四を抜いて三十五になる」（「改名披露その他」）。最初に引いた「私の略歴」は昭和六年（一九三一）の文章で四十の年。「改名披露その他」はその五年前、『文藝春秋』大正一五年（一九二六）一月号の掲載だ。芥川龍之介への言及もある。

妙なことを綴ったのは、終わりなきウィズコロナと戦争の中で、今年の五月が、日文研の三十五周年であったことからの連想である。私が日文研に赴任した二〇一〇年は、二年後の二十五周年記念行事に向けて、いくつかの事業が、すでに始まっている時期だった。時を経て、二〇一七年五月刊行の本誌『日文研』は、文字通り「創立三十周年記念特集号」と銘打った大冊である。しかし今年は……。いささか無念だが、先に述べた事情で、その盛大な予祝は、五年後の未来、二〇二七年の四十周年へと先送りしたい。

あたかも直木三十五になぞらえて言えば、日文研の「三十三」は、ちょうどコロナ禍が深刻化していく二〇二〇年に相当する。確かに「三三と重なるのは」「極悪」であるようだ。しかしそれも、願いを込めて「三十五になる」今年、二〇二二年で区切りとしたい。直木も改名は、それが最後であった。

本誌にとっても「三十一から二、三」は激動の中にあった。議論を経て「読み物（「エッセイ」

「センター通信」）のみ掲載する号と、読み物プラス前年度一年度分のデータ（「共同研究」「基礎領域研究」「彙報」「所員活動一覧」）を掲載する号とに分けて年二回（三月・九月）発行して」いた編集形態は、二〇二〇年三月の六四号をもって終了。「今後は読み物プラス前年度一年分のデータを掲載」する「年一回の発行」へと変わる（送付文より）。新生の初号が同年九月の六五号で、本号はそこから数えて三冊目。年一回の刊行となってからは二年目にあたる。

さて、アニバーサリーのイベントは先送りだが、本誌は、三十五周年にふさわしい充実したラインナップになっている。たとえば巻頭に掲げた細川周平名誉教授のエッセイは、二〇二二年三月、アメリカ最大のアジア学会ＡＡＳで基調講演をなさった、歴史的に貴重な体験談だ。この基調講演には、二年以上にわたる構想があるようだ。前年三月の同大会では、コロナ禍でＡＡＳの会長を一年長く担当されたクリスティン・ヤノ氏による、チンドン屋の映像を流しながらの挨拶があった。少なからず驚いた。その一月程前、細川名誉教授は、こちらもコロナ禍で延引した退職記念講演を「チンドンの因縁」と題して語っていたからだ。ヤノ氏と細川名誉教授の交流は、文章をお読みいただきたい。二〇二一年のＡＡＳを眺めて、ヤノ・細川対談を日文研でできないかなと夢想し、細川さんにお声がけしてみたことがあったのを思い出す。それが、ずっと大きな規模と企画で実現した。なによりの記念碑的国際日本文化交流として、感慨深い。

その他にも……、と本号の中身を一つ一つ説明したいところだが、やめておこう。拙い私の文章では、銀表紙の貴重な余白を汚し、読者を退屈に導く不毛に陥るばかりだから。書き手はいずれも、さまざまな形で日文研を支える、国際的な研究者ばかりである。一つ「センター通信」として大事なことがある。伊東貴之教授が論ずる、二〇二三年度からの総合研究大学院大学の大統合だ。まさしく日文研と「国際日本研究」の基盤に関わる大問題なので、締めくくりに配置した。最後まで、熟読をお忘れなく。

荒木　浩（国際日本文化研究センター教授）

遠隔画面で語る郷愁

細川周平

さる二〇二二年三月、アジア学会（Association for Asian Studies）ホノルル大会にて、基調講演という大任を任された。依頼してきたのはハワイ大学のクリスティン・ヤノ教授、日本の大衆文化を専門とする文化人類学者で、ハローキティの研究書『ピンクのグローバライゼーション』が『なぜ世界中が、ハローキティを愛するのか？』の邦題で翻訳されている。彼女が博士論文『国民の涙を絞る』（一九九五年）という演歌人類学を発表した頃に紹介を受けた。こちらもブラジルのカラオケについて調査中で意気投合し、ホノルルに呼ばれてその話題を話したこともあるし、彼女が日文研ハウスにしばらく滞在したこともある。拙著『遠きにありてつくるもの』（二〇〇八年）の英訳（二〇二〇年）が、日文研の翻訳助成を受けて出版されたのが彼女の目に留まったようで、そこでのブラジル一世の心情分析を、かつて流行歌の感情表現から日本人のノスタルジアを国民としての自己認識として論じたハワイ三世として面白く読んでくれた。

オンラインは前提だった。ぼくはコロナ禍と同時に日文研を退官したため（と口実にしているが本性として）ズームが技術的にも心理的にも苦手で、当初、友人の研究室からサポートを受けつつ講演する段取りをつけたが、その後録画と知らされ、恐る恐る自宅から画面に話しかけた。ほぼ初めての経験だった。パソコンに向かって話すのは大舞台の割に妙味に欠けたが、出来上がった映像は話す様子とパワーポイントをうまく編集していたと思う。

『遠きにありてつくるもの』のタイトルは、もちろん室生犀星の「遠きにありておもうもの」をもじっている。「おもう」とは心のなかに「つくる」ことであると再定義し、故郷のそとにあって個人の創作や行動、集団の組織や交際によって、故郷を参照点とする何かを「つくる」行ないを、文学活動や芸能から論じている。感情、情緒、心情などと堅苦しく構えず、日常語の「思い」を理論的に磨くことを出発点とした。英語訳ではロンギング、センチメント、メモリー、アフェクションなどと手際よく訳し分けられている。ポルトガル語ならサウダージに近い。

ヤノの演歌論が『憧れの涙』*Tears of Longing*と題して改訂出版されたことにちなみ、「憧れと所属」"Longing and Belonging"という語呂合わせを思いついたときに、講演の大体の方向は決まった。故郷への憧憬とは故郷への所属を望むこと（つまり想像力のなかでつくること）を意味し、それは故郷をどう解釈するかに応じて変化する。その感覚や意味は他の分野でいうアイデンティティに相当する。そして所属感の移り変わりにつれて、憧憬もまた移り変わる。こんな骨子を日本に限定されないアジアについての研究者全般に伝えようと願った。

ノスタルジアはギリシア語の故郷と痛み（病）を組み合わせた造語で、英語ではホーム・シックネスと訳された。日本語の「郷愁」はドイツ語のハイムヴェーに近い。どちらにも愁いはあっても病いはない（うつ病に至る場合が多いとはいえ）。「思い」の語がうまくあてはまるのは「愁い」の濃い感情だからで、詩歌に乗りやすい理由もそこにある。ある戦前ブラジル移民は戦後三〇年たって「郷愁は生きもの」という思い出記を書いた。日本のことなぞ考えるものかと強がりを言った友人が、故郷の母親から手紙を受け取ったとたん、恋しさのあまり鬱になってしまったという内容で、郷愁は個人の意志を超えて勝手に動く「生きもの」と決めている。故郷への思いは移民が共同体を維持するのに必要な「義務的な感情」（マルセル・モース）

なのかもしれない。郷愁は甘ったれの気持であると否定する観方に対して、見えない心の絆と見直し、それに結ばれた移民の営みを心情に即して理解することを求めた。その表現素材のひとつが文芸だった。

講演はまず短詩作りが日本語生活では草の根レベルに広がっており、移民社会でも本国と同じ参加型のインフラが素人の創作を支えていることを説明した。特別な人だけが詩に思いを託すのではない。小学卒もいれば六〇代で初めて試した遅咲きもいる。社交的な目的で集まる者も多い。これが新聞投稿や結社を基盤とする短詩文芸の出発点だ。ブラジルでもそれほど変わらない。郷愁は移民文芸のありふれた題材だが、A面の模範的な描き方とB面の押し殺された感情表現のふたつに大別できる。前者の例に、

故郷の立科山に雪積めば兎追ふとて祖父微笑ぬ
帰りゆきてつひに住みつかむ故郷と思ふにあらねただに恋ひこむ

がある。日本のふるさと風景の原点とされる信濃出身で、移住前に『アララギ』に拠った本格派の歌人、岩波菊治（一八九七年～一九五二年）は、こうした故郷への思いをたくさんの歌に託し、歌碑も建てられた。秀才の書きぶりだが、反対にもやもやして屈折した心情も、その場その場の文芸人によってずいぶん書かれている。読んでぐっとくるのはこちらの方だ。たとえば「永住の心へチクチク帰国心」に描かれた未練、「ふるさとは引き揚げた国よその国」に描かれた負け惜しみ。「郷愁に腰かけたまま五十年」は自嘲のかたちを採っている。最後には、

異国の土になる運命の手を感じ
あきらめてあきらめきれぬ帰国
郷愁に疲れしっかと抱く異郷

の諦念と納得の境地に至る。移民の心情だけでは話題が狭すぎると思い、九鬼周造の「情緒の系図」に触れた。彼の「いき」や偶然についての論考は、英語の日本思想史でも扱われ、移民研究の外に話題を拡げるのによいと考えた。ヤノが演歌人類学の理論的支えとした見田宗介『近代日本の心情の歴史』の原型に当たる。

講演の後半ではその情緒を引き起こす要因や触媒を話題にした。最も普遍的な要因は距離と時間である。

諦めもつこう地球の内なれば
日本へ一メートル近く葬られ

前者が絶望的な隔たりのなかでの諦めを詠むなら、後者はその感情をユーモアで突き放す。葬儀の際の悲嘆をひっくり返したような奥の気持ちであると思う。公文書には表われない。もうひとつの決定的引き金は老いで、星空を見ながらの思いを詠んだ「郷愁は銀河に流し農に老ゆ」を紹介した。

これら普遍的な要因のほかに、日本食、日本映画、手紙、土産品など折々に郷愁を刺激する個人的な触媒がある。映画本編の始まる前に、松竹の富士山像を見るだけでもう感涙にふけっ

ていたのは、一人二人ではないだろう。日本独自の触媒は軽く触れるだけにし、他国の移住者にも共通する帰化手続きについての連作短歌を詳細に取り上げた。母国から後生大事に抱いてきたパスポートが紙きれとなる儀式と考えたらよい。作者は日系ブラジル婦人界のリーダーだった水本すみ子（一九三二年～二〇一一年）で、講演の題名に選んだ「所属」を非常に鮮明に表している。

くろぐろと墨塗られゆくわが過去か指紋の流れ鮮明なれど
知らざりし密なるものの剝がさるる痛みに耐えるわれの日本（ニッポン）
帰化人とう馴染なき名にこだわりつつ歩みゆく町は異邦のごとく

所属の変更は必ずしも心情の居場所の変更を伴わない。母国への法律上の所属が心情の所属とは別に、指紋やパスポートに託されていることを彼女は強く感じた。二重国籍を認めない日本への批判を暗に込めていると政治的に読むことも可能だろう（それを論じるだけでは歌の真意には届かないだろうが）。

ここまで具体的な詩歌から論じてきたが、結論ではぐっと抽象的に「故郷（ホーム）の概念は地理的でありかつ実存的である」と切り出した。原著にはないまとめで、人は故郷を去ることはできても無関係にはなれないという安部公房の満州経験についての総括を踏まえている。両面が合わさってホームは強さの源泉になり、心の最後の安息所にもなる。実存というと哲学用語になってしまうが、生きる存在としての根というような意味で使っている。ホームは自民族中心的で自己中心的で、保守的で排外的でもある。だから外からは批判の対象となりうるが、

同時にありふれた自己の最も私的な、奥の部分を支えている。結論らしく思い切り断定的に語った。

ちょうど講演準備中にデヴィッド・バーンとスパイク・リーの映画『アメリカン・ユートピア』を見て、バーンが四〇年以上前からトーキング・ヘッズを率いつつ、鋭い歌詞でアメリカ社会の喜びと病理を描いてきたことを思い出した。彼とブライアン・イーノの「ホーム」は拙著『遠きにありて…』と同じ二〇〇八年、日系ブラジル移民百周年の年のアルバムに入っている。その偶然が気に入って、その歌詞の抜粋を読み上げて講義を終えることにした。ケレンと嗤われるかもしれないが、広い範囲の参加者にホームの概念の大切さ、複雑さを伝えるのにふさわしいと思った。「天は知っている、何が人類を生き生きとさせているのかを／ホーム、なぜいつも帰りつづけるの／ホーム、ぼくの世界がふたつに分かれているところ／ホーム、両親は真実を語っていたのか／ホーム、なんてヘンテコなもの／ホーム、だれもまだ語ったことがない／ホーム、何をやっても引っかかってくる／ぼくらはホーム、とつぜん生き返る」

一行一行深い歌詞を見せながら、みなさんの学問領域でホームの意味深長さに思索を拡げ、本大会のタイトルで提案されている「グローバル・エイジアズ」の時代に、「ホーム・スタディーズ」が可能になればそれに勝る喜びはありません、とお行儀よく結んだ。アジアの人々の遠距離大規模移動は日常化しており、百年以上前、ブラジルで書かれた俳句短歌のある断片は共有されるのではないか。そんな意図がこの歌詞から伝われば、いいと思った。

ただし話し終わっても拍手もあいさつもない。誰が聞いていたのかも分からないし、誰からの反応も伝わってこない。あまりにあっけなく気が抜けた。言いっぱなしで一時のアイデアは散ってしまった。それ自体は残念だが、オンライン時代の話術・講演術を覚えずに退官できた

タイミングには感謝した。それはマスクごしで話すのと同じようなよそよそしさを感じさせ、旧人類としていくら繰り返しても身につかないし、幸いそれで許されている。故郷の家族や友と画面を介していつどこでも会話できる時代にどんな郷愁が可能なのか、ホームの意味は変わってしまうのか、この大きなテーマは次世代の学徒に任せたい。

（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター所長／国際日本文化研究センター名誉教授）

趣味以上・副業未満―公共音楽研究ことはじめ―

等松春夫

趣味以上・副業未満

クラシック音楽に関する文章を書くことが少なくない。「ご専門は西洋音楽史ですか」と尋ねられると「趣味以上・副業未満です」と答えている。そもそも防衛大学校で「政治外交史」や「戦争史」を講義する人間が「趣味以上・副業未満」であれ、なぜクラシック音楽に関わることになったのか。その経緯を、「本業」である国際政治史との関連も含めて振り返ってみたい。

音楽放蕩の日々　牛津篇

英国のある財団から非常にありがたい奨学金をいただき、一九九一～九七年、二〇代後半から三〇代前半にオックスフォードの大学院で学んだ。前半はオックスフォード、後半はロンドンで暮らした。若すぎず年すぎず良いタイミングであった。

オックスフォードで留学生活を始めた頃、強い印象を受けたのは大学生活の隅々にまで音楽が浸透していることだった。オックスフォード大学には三八のカレッジがある。創立が一三世紀にまで遡る古色蒼然としたカレッジには、必ず英国国教会（アングリカン）の礼拝堂と付属合唱団があった。毎夕の礼拝では合唱団が聖歌を歌い、オルガン専攻の学生が荘重な調べを奏でる。プロ・アマを問わず室内楽や声楽のリサイタルも盛んである。ホリウェル・ミュージッ

ク・ルームは、一七四八年に建てられた英国初のコンサート専用ホールで、ヘンデルやハイドンとゆかりが深い。入学式や学位授与式が行われるシェルドニアン講堂にはしばしばオーケストラが来演し、町の劇場にはウェールズ・ナショナル・オペラやグラインドボーン・ツーリング・オペラが巡演に来て高水準の舞台を見せる。名誉博士号を授与されたヴァイオリニストのアイザック・スターン（一九二〇～二〇〇一）がシェルドニアン講堂で開いた返礼リサイタルも聴いた。ハイドン（一七三二～一八〇九）も一七九一年に名誉博士号の返礼に交響曲第九二番を自ら指揮し、同曲は現在《オックスフォード》交響曲と呼ばれている。

音楽放蕩の日々　倫敦篇

筆者の博士論文は「国際連盟の委任統治制度の特質を、日本の連盟脱退後の南洋群島委任統治継続に対する連盟と各国の反応を手掛かりに、明らかにする」というものであった。[1] この制度の背景となった英国の植民地統治に関する資料や文献はオックスフォードのボードリアン図書館、ローズ・ハウス（セシル・ローズ財団）、クイーン・エリザベス・ハウス（帝国コモンウェルス研究所）に豊富にあった。しかし、一九二〇～四〇年代の資料を見るにはロンドンの国立公文書館（Public Record Office、略称ＰＲＯ。現在はNational Archives）、大英図書館、東洋アフリカ研究学院（ＳＯＡＳ）や経済政治学院（ＬＳＥ）等ロンドン大学の図書館へ行かねばならない。そこで、留学時代の後半はロンドン北郊ハムステッドの学生寮に住み、資料調査と論文執筆に勤しんだ。日中はＰＲＯや大英図書館の読書室で過ごし、夕方からはいそいそとサウスバンク・センターやバービカン・ホールやコヴェントガーデンへ向かった。

英国のコンサートホールや劇場では公演当日に学生証を示すと、驚くほど安価な学生券が入

手できる。「金はないが暇はある」若者を今のうちに捕まえ、将来給料を取る身分になったらフル・プライスのチケットを買ってでも来てくれる愛好家に育てるという深謀遠慮である。この特権を大いに活用して、七年間の留学期間中に六〇〇以上のコンサート、リサイタル、室内楽、オペラ、演劇に足を運び、放蕩の限りを尽くした。

中でも英国放送協会（ＢＢＣ）が毎年夏に主催するプロムナード・コンサート（ＰＲＯＭＳ）に三シーズン続けてほぼ日参したことは、音楽と社会の関係を考える契機となった。ＰＲＯＭＳは一八九五年に指揮者ヘンリー・ウッド（一八六九～一九四四）が、オーケストラ愛好者の裾野を広げることを目的に始めたコンサート・シリーズである。七月中旬から九月中旬までの八週間、ロンドンのケンジントンにあるロイヤル・アルバート・ホールを会場にして毎晩オーケストラ演奏会やオペラの演奏会形式上演が行われる。収容人数八〇〇〇名を誇る巨大なホールは、ヴィクトリア女王が早逝した夫君アルバート公の追善に一八七一年に建てさせた。ＰＲＯＭＳでは広大な空間を利用して大規模な合唱を伴う作品が多く取り上げられる。九月半ばの楽日の演目には、パーセル、ヘンデル、パリー、エルガー、ヴォーン・ウィリアムズ、ホルスト、ウォルトンなど英国を代表する作曲家たちの作品が並ぶ。トリの定番曲はエルガー（一八五七～一九三四）の行進曲《威風堂々》第一番に基づく《希望と栄光の国》とパリー（一八四八～一九一八）の合唱曲《エルサレム》である。前者は全盛期の大英帝国讃歌、後者は第一次世界大戦の戦没者への鎮魂曲である。高価なボックス席から安い立見席までアルバート・ホールをぎっしりと埋めた八〇〇〇人の聴衆が、舞台上のオーケストラ、歌手、合唱団と共にこの二曲を高らかに歌い上げる。この模様はＢＢＣが実況放映・放送して英国全土で数百万人が視聴する。いささか時代錯誤的ではあるが、これは社会階級や地域を超えた、帝国意識と国民意識を

再確認する儀礼ではないのか。

合唱といえば、留学時代に気付いたことは英国における合唱人口と合唱音楽祭の多さである。ロンドンには一八七六年創立のバッハ合唱団があり、かつてはヴォーン・ウィリアムズ（一八七二〜一九五八）が音楽監督を務めた。地方都市でも合唱音楽は盛んで、①ウースター、②ヘレフォード、③グロースターの三都市が毎年七月に持ち回りで行うスリー・クワイヤーズ・フェスティヴァルは発足が一七一五年である。筆者は留学中に①②を、三年前の二〇一九年に③を聴いた。主会場は各市のアングリカン大聖堂で、目玉はヘンデル、ハイドン、メンデルスゾーン、エルガー、ウォルトンらの合唱付き管弦楽大作である。オーケストラや歌手はプロが招聘されるが、合唱は地域のアマチュアたちであり、その水準は非常に高い。音楽祭の運営は地元の人々が手弁当で行っている。多くの人々が集い、コンサートホールや大聖堂という広大な空間で演奏され歌われる音楽が、社会にまったく影響がないはずはない。このような音楽を「公共音楽」と呼んでもいいのではないか。英国社会には「公共音楽」が満ち溢れていた。

英国音楽なき国

「音楽なき国 *Das Land ohne Musik*」とは、二〇世紀初頭にオスカー・A・H・シュミッツ（一八七三〜一九三一）というドイツ人が英国を揶揄した言葉である。もちろん「音楽なき」とは誇張で、英国では音楽活動が盛んであった。産業革命以降、富と知性を有する上流中産階級の人々を中心に高級な芸術音楽が好まれ、ハイドン、ベートーヴェン、ウェーバー、メンデルスゾーン、ブルッフ、ドヴォルジャークらは英国の聴衆を想定した数多くの名曲を書いている。しかし、国際的な知名度のある作曲家は、一七世紀のヘンリー・パーセル（一六五九〜

一六九五）以降の英国にはいなかった。その意味で、さきの言葉を「作曲家なき国」と修正すればあながち間違いではない。英国音楽がドイツ人たちにも一目置かれるようになるには、エルガーの《エニグマ変奏曲》の初演（一八九九年）を待たねばならない。

筆者が留学していた一九九〇年代、一部の英国音楽愛好家は別として、日本のクラシック音楽ファンの間で英国の作曲家たちは十分に市民権を得ていなかった。せいぜいのところエルガーの《威風堂々》、ヴォーン・ウィリアムズの《グリーンスリーヴスによる幻想曲》、ホルストの《惑星》が定番であった。人気があったのは圧倒的にドイツ、フランス、ロシアの音楽か、イタリア・オペラであった。その頃の日本は「英国音楽なき国」だったのである。

かくいう筆者も留学前には特に英国音楽に親しんでいたわけではない。しかし七年間の留学中に日本ではなじみの薄い多くの英国作品に触れ、筆者は英国音楽の多彩な魅力に引き込まれていた。幸いなことに、二一世紀に入り日本の音楽家たちも英国音楽に目を向け始める。しかし、作品を解説する人間がなかなかみつからない。二〇〇四年に東京交響楽団がエルガーのオラトリオ《使徒たち》を演奏した際、筆者にプログラム解説執筆の依頼が来たのはこのような事情からである。キリストの受難と使徒たちの覚醒を描いた《使徒たち》は、演奏時間二時間を超えるドラマティックな大作で、一九〇三年にバーミンガムで初演された。一〇一年後の日本初演で解説を執筆するという栄誉に筆者はあずかった。以後、英国音楽の楽譜解説、演奏会プログラム、音楽雑誌の論説などの執筆依頼がしばしば来るようになった。留学時代に古書店で入手した楽譜や音楽研究書、大量の演奏会プログラムが大いに役立っている。

おわりに

このたび『政治と音楽』という研究論文集が刊行された。[2] 十余年前に明治学院大学の半澤朝彦教授を中心に同名の研究会が作られ、その成果が結実したのである。筆者も「帝国のこだま―イギリス帝国の変容と公共音楽」という一章を執筆した。「公共音楽」と言えば、筆者は日文研の「戦争と鎮魂」プロジェクトのためにも「慰霊のしらべ―戦争と英国の公共音楽」という論考をまとめている。二度の世界大戦を中心に、戦没者の慰霊に英国で公共音楽がいかなる機能を果たしたかを考察した。遠からず活字になることを楽しみにしている。

（防衛大学校教授／国際日本文化研究センター客員教授）

註

（1）英文博士論文を基にした日本語による拙著は等松春夫『日本帝国と委任統治―南洋群島をめぐる国際政治 1914～1947』（名古屋大学出版会、二〇一一年）。原文のエッセンスは以下を参照。Haruo Tohmatsu, 'Japan's Retention of the South Seas Mandate, 1922–47,' in R.M. Douglas etc. ed, *Imperialism on Trial: International Oversight of Colonial Rule in Historical Perspective* (Lexington Books, 2006)

（2）半澤朝彦編『政治と音楽』（晃洋書房、二〇二二年）。なお、本稿で言及した事項の典拠は、同書所収の拙稿の註および文献目録を参照されたい。

草双紙伝記の世界——西南戦争期の西郷隆盛伝

森岡優紀

二〇二二年春、筆者は鹿児島から熊本に向けて点在する西南戦争の戦役跡を辿った。かつて熊本鎮台が置かれた熊本城は壮大であり、攻め落とされずに薩摩軍を退却させた姿を留めている。熊本近郊の激戦地、田原坂は春もたけなわであり、小高い山の裾野には小さな村が点在し、満開を迎えようとする桜を見に散策する人が行き交っていた。

明治一〇年の西南戦争の勃発とともに、西南戦争の経緯を書いた和装本の小冊子が大量に発行される。これらの冊子は西南戦争の報道記事をまとめたもので、「実録」もしくは「ニュース冊子」と呼ばれている。西南戦争の戦役跡を辿る旅は、小さな和装本や錦絵に描かれた世界の虚実を浮かび上がらせ、興味深いものであった。ここではこれらの冊子類のなかでも、西郷隆盛を取り上げた伝記的な読み物について紹介してみたい。

まず簡単に西南戦争時期に発行された印刷物について紹介してみよう。江戸時代には新聞の前身ともいわれる非合法のかわら版はあったが、時事を伝える合法的なメディアは存在していなかった。明治に入ると、政治経済や社会事件などの時事を全国民に伝える新聞が相次いで創刊される。しかしこれらの新聞は「大新聞」とも呼ばれ、大量の漢字がふりがなを振らずに使われており、一般庶民は読むことができるものではなかった。明治初期より行われた自署率調査から推測すると、一般の成人男性でもひらがなと簡単な漢字を読むことができるのは全国平

均でせいぜい三、四割前後だったのではないかと思われる。このような状況下で生まれたのは、漢字にふりがなが振ってある「小新聞」や錦絵に報道記事を書き込んだ錦絵新聞であった。そしてこれらのメディアとともに登場したのが「ニュース冊子」である。新聞報道の記事のなかで、ある事件をピックアップし、漢字にふりがなを振るなど読みやすくし、事件の経緯をまとめた小冊子である。明治七年の台湾出兵頃から発行され始め、熊本神風連の乱、秋月の乱、萩の乱などの士族の反乱を題材にして増加し、明治一〇年の西南戦争で激増する。冊子には、文字だけのものから、数枚の挿絵を挟んだもの、毎頁に挿絵があるものなどと様々な体裁がある。西南戦争期には、新聞記事にはない視覚的情報を補うために挿絵が挿入された冊子が徐々に増えていった。また、四角囲みに記事を書いた、大判三枚続の彩色刷りの錦絵も多く発行されている。これらの錦絵は「西南戦争錦絵」とも呼ばれており、新聞記事をもとにしている点や人々に視覚的情報を与えるという点では冊子類と共通した目的をもっており、また冊子類と版元、作者、絵師が共通していた。

それでは、ここで本題となる明治一〇年から一一年初までに出版された西郷隆盛の伝記を紹介してみよう。西南戦争期の「ニュース冊子」は一〇〇冊近くに上る。そのなかで西郷隆盛の伝記的読み物は、管見の限りでは一二冊、西南戦争の司令官等の草双紙風の人物列伝などは三冊出版されている。紙面の幅もあるので、そのなかの数点を取り上げてみたい。

早川徳之助編輯、松月保誠画『絵本西郷一代記』（小森宗次郎出版、一八七七年）。毎頁ごとに絵が挿入される草双紙風の伝記となっている。彩色刷りの摺付表紙がついており、書型は中本。毎号の値段は三銭とある。当時、大判三枚続の西南戦争錦絵は六銭で売られていた。六銭は米一升が買える値段に相当したことを考えると、三銭の冊子もそれほど安くはない値段であ

る。編輯人は早川徳之助、絵は松月保誠、出版人は小森宗次郎と書かれている。編輯人の早川徳之助と絵師の松月保誠は同一人物であり、「早川松山」の名で知られている浮世絵師である。このように浮世絵師が編者として署名をする場合も多く、その場合には元本が存在することが多い。『絵本西郷一代記』が参照したのは山本園衛の『西郷隆盛蓋棺記』である。一号から一四号まで発行され、一号から六号は一〇月二九日御届、七号から一四号は一二月三日御届であり、西南戦争が終結した後に作成されている。内容は、一号から四号が西郷隆盛の誕生から征韓論を経て野に下るまで、五号から一四号は私学校学生による火薬庫襲撃事件から西郷隆盛の死までである。以上のように、半分以上が西南戦争の記述に費やされている。西南戦争以後の記述は、西郷の言動よりも西南戦争の経緯、戦役の状況、戦役でのエピソードが書かれている。

挿絵（図一）には私学校の「賊徒等製造の場所にきたりて火薬を掠奪なさんと欲す」という題がついている。しかし、本文

図一　『絵本西郷一代記』七号（出典：国立国会図書館：https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/884474）

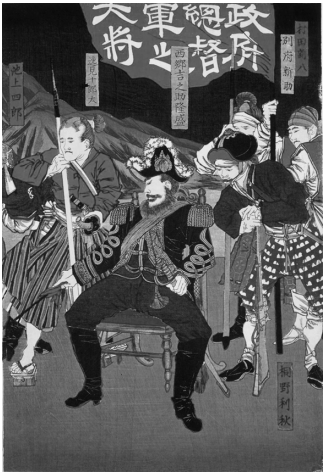
は既に薩摩軍と官軍が熊本とその近郊で戦闘を始め、勝敗がつかない状態であることが書かれている。火薬庫襲撃事件に関しては二号前の五号に書かれており、その頁の挿絵には「会津白虎隊切腹の図」が描かれている。このように本文と挿絵が全く合っていない。挿絵を一気に描き、その後に本文を書き入れたが、思ったよりも本文の分量が多く、挿絵と本文がずれてしまったのであろう。挿絵は西南戦争錦絵などをヒントにして、それをアレンジして描かれたと思われる。図二の錦絵は明治一〇年二月八日の夜に私学校が県庁を襲った図である。人物の動きや服装などがそっくりである。このように冊子は粗雑な作りであるが、時事に即した新しい内容に挿絵が添えられ、旧い「一代記」が一新されている。

次に、西野古海編、絵師未詳『鹿児島英雄銘々伝』（木村文三郎出版、一八七七年八月九日御届、九月発行）を紹介してみよう。『絵本西郷一代記』が人物の一生を物語風に綴った長編伝記の「一代記」の体裁を借りたものだとすると、『鹿児島英雄

図二　月岡芳年「新聞鹿児嶌模写」明治一〇年二月一九日御届（https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1307877）

銘々伝』は「銘々伝」という短編伝記の体裁を襲っている。『鹿児島英雄銘々伝』は毎頁ごとに一人が紹介されており、「西郷隆盛」から始まり、次は「篠原国幹」、「村田新八」と続く。このような「銘々伝」の形式を取った伝記は西南戦争以外でも多く出版されており、明治以降には桜田門外の変、明治維新の志士の銘々伝が出版されている。興味深いのは、西郷隆盛が現在一般的に知られている姿とは全く異なる姿で描かれていることである。

図三　『鹿児島英雄銘々伝』の「西郷隆盛」（https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/884712）



図四　山嵜年信「鹿児島記聞：川尻本営図」明治一〇年四月一九日御届（https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1307889）

西郷隆盛（図三、図四）はナポレオン帽とも呼ばれる二角帽子をかぶり、儀式に参加する際の大礼服を着用し、かつ髭を生やしている。西南戦争錦絵にも同じ姿の西郷隆盛の肖像がよく見られる。西郷隆盛の横の逸見十郎太（辺見十郎太）や別府新助（別府晋介）は和装で描かれている。また篠原国幹や桐野利秋等も鎧姿や和服で描かれることが多く、西

郷隆盛のみが大礼服で戦場に立つ姿が描かれ、かつて政府高官であったことを際立たせている。もちろん錦絵に描かれた大礼服姿の西郷は想像で描かれたもので、当時西郷が着用したとされる陸軍大将軍服もこれほど煌びやかな服ではない。ナポレオンを思い浮かべさせる二角帽は後の礼服に用いられることがあったが、西南戦争中にかぶっていたとは考えられない。当時の薩摩軍司令官の服装は薩摩藩で流行したフェルト帽に、上衣は和服を半マントルに、下衣も和服をズボンに作り直したという質素なものであった。このように西郷隆盛は「逆賊」と呼ばれながらも、官軍さながらの姿で描かれており、西郷への敬意が表されている。

図五　『鹿児島美勇伝』の「西郷隆盛」と「有栖川宮幟仁親王」（https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/884726）

次に、大西庄之助、絵師未詳『鹿児島美勇伝』（一号～三号、大西庄之助出版、一八七七年一〇月二二日御届）を紹介しよう（図五）。西南戦争開始から間もない三月二二日に一、二号の御届が出された後、一一月の一六号まで出版され、様々な人物を紹介している。また一〇月に一号から三号が再販されており、人気の高

さが窺われる。『鹿児島英雄銘々伝』が一人物一頁で紹介していたのに対し、『鹿児島美勇伝』は見開きの各頁に二人の人物を対にして描いている。これは「英雄くらべ」とも呼ばれる体裁を借りたものである。右の頁には征討総督として出征した有栖川宮幟仁親王、左の頁には西郷隆盛が載っている。有栖川宮幟仁親王は和装で、西郷隆盛はやはり大礼服である。実は、西南戦争に対し最も関心を寄せたのは士族であり、一般庶民にとって西南戦争は士族同士の争いと感じられており、東京や大阪などの安全な場所からの高みの見物だったのではないかとも言われている。同時期に『西南人名一覧』という西南戦争の司令官やその妻を百人一首風のカードにした冊子も発売されており、序文には秋の夜長の無聊を慰めるために作ったとある。この本も同様に愉まれたのであろう。

以上、西南戦争期の西郷隆盛伝を紹介した。これらの冊子の特徴は、江戸時代に御法度だった政治的時事的な人物を題材とした新しさと、戯作風の古い体裁という点にある。近代移行期にはこのような近代的な新しい発想を古い形式で表現するという現象がよく見られる。近世において錦絵は美人画や名所絵などに制限されていたが、西南戦争では戦役の一場面を描き、新聞報道に欠けていた視覚的情報を提供した。また、時事にまつわる人物を取り上げることがタブーであった伝記も、西郷隆盛のような現在進行形で進む事件の主人公を題材にして書かれるようになっていく。このように、西南戦争期に出版された西郷隆盛伝は、時事にまつわる人物を描く端緒を作り、幅広い層に読まれたのである。

（日本学術振興会特別研究員／国際日本文化研究センター外来研究員）

「記憶の境界」からみる沖縄のいま

エドワード・ボイル

二〇二二年五月一五日

二〇二二年五月一五日、沖縄は日本の統治下に復帰して五〇年を迎え、宜野湾市の沖縄コンベンションセンターではこれを祝う公式記念式典が開催された。天皇、皇后両陛下が東京からリモート出席されたこの式典は、テレビやインターネットでも広く放映された。三時間以上に及ぶ式典の第一部は、天皇陛下のおことば、岸田首相、玉城沖縄県知事の式辞といった要人の挨拶が主で、第二部では、琉球王朝の宮廷儀礼から空手の実演まで、沖縄文化が広く紹介された。そして会場内で交わされる琉球語、かりゆしシャツ、（天皇陛下も着けられていた）ミンサー織ネクタイなど、沖縄の文化を象徴する要素も式典全体を通じて見て取れた。

ここでいう沖縄とは、必ずしも現在の沖縄県に限定されるものではない。式典の最後に流れたビデオで世界中から沖縄の踊りが届けられたことがそれを示唆する。世界中で暮らす、沖縄にかかわり、むすびついてきた人々の姿が沖縄を体現しているものである。沖縄の伝統は、県境はおろか、日本の国境をも超えて広がる。だが復帰五〇周年式典は、こうした世界的な文脈にある「沖縄」を日本というナショナルな枠組みに押し込めようとしているのではないかと私は感じた。

五月一五日の式典は、単にその「日本復帰」を祝ったものではない。私がかねがね考える「記

憶の境界」を引くためのイベントであったように思う。「記憶の境界」とは、人びとが地域でかかわってきたさまざまなレベルの記憶を境界付け、その記憶が空間のなかで再構成されるプロセスを分析するボーダースタディーズ（境界研究）のアプローチの一つである。同じ事象であっても、誰がどこからどの時間と空間を切り取って文脈化するかで、差異化された記憶の物語が新たに紡がれる。私はこのアプローチを使って、いまの沖縄がもつ「記憶」の意味を少し考えてみたい。

「固有の領土」としての沖縄

最初に断っておかねばならないのは、沖縄がそもそも一つではないということだろう。米軍による「鉄の暴風」を体験したのは、主として沖縄本島である。八重山、宮古は（いやその島々においてでさえ）第二次世界大戦をめぐり異なる体験をしている。例えば、「マラリア戦争」を経験した石垣の住民たちは本島における日本軍の「蛮行」を共有するが、台湾と親しかった与那国の人たちにその記憶はない。「沖縄」という言葉でその伝統的な慣行や慣習、衣装（実際には多様なのだが）を一つに折り畳み、東京からの演出で式典に仕立てるという行為は、沖縄を単色化するとともに、日本の「固有の文化」の一部としてこれを祝福しようとしている。「固有の」という表現は、領土の係争に関わり、近年、日本の政府やメディアが北方領土、竹島、尖閣諸島に対して多用するものだが、広い意味でいえば、沖縄そのものにもあてはまろう。

振り返れば、戦後間もない頃、何よりも返還が望まれていた「固有の領土」とは、一九七二年までアメリカの統治下にあった沖縄であった。沖縄復帰は「戦後の終わり」のシンボルであると同時に、近代日本が形成されるときに「固有の領土」として引き受けた島々の領有に対す

る再確認でもあった。一九七二年に日本に施政権が返還された尖閣諸島のみならず、「沖縄」そのものに対しても中国と台湾がこれを日本の領土とすることに潜在的に疑義を表明し続けていることに留意しよう。五月一四日午前、中国海警局の船四隻があたかも式典に警告を発するかのように、日本の領海に侵入したことも記憶に新しい。

岩下明裕（北海道大学）、河龍出（ワシントン大学）とともに編集した近刊、*Geo-Politics in Northeast Asia*（Routledge, 2022）で、私たちは次のような考察をしている。近年、北東アジア地域で海をめぐる紛争が目立つようになったのは、国連海洋法条約（ＵＮＣＬＯＳ）の施行により、海での「囲い込み」が始まったことに起因する。いま各国は海域をフロンティアととらえ、（広い意味で）自国の「領土の一部」と考え、権利の主張・管理を積極化している。だが、海に「固有の」という形容詞をつけることは難しい。そこでどの国も歴史を利用して、海を取るための起点となる島々を「我が国が先に所有していた」なる神話を創り、自国の記憶空間、つまり博物館などを通じてこれを宣伝している。国際法的にはあまり説得力はないのだが、古い歴史をもてばもつほど、島々の「固有性」を主張でき、海への権利もアピールできるとみな信じ込んでいる。

消された歴史

興味深いことだが、今回の沖縄の日本復帰記念式典では、このように過去の紐帯を強調する旧来の歴史利用とは違う手法が用いられた。確かに文化に焦点を当てた第二部では、沖縄の人々の慣習の歴史性が強調され、これらのルーツが琉球王朝であり、戦前から発展していたことも紹介された。他方で、「沖縄」そのものについては過去に触れない演出で彩られ、沖縄復帰

の経緯を語るビデオ映像は、沖縄戦直後のまちの荒廃から始まり、一九四五年以前に遡るシーンはない。重きが置かれたのは、沖縄都市モノレールの開通（那覇、二〇〇三年）、那覇空港の二本目の滑走路供用開始（二〇二〇年）など一連の開発プロジェクトによる、復帰後の沖縄県の劇的な変化――すなわち東京の支配下でのインフラ整備の発展とまちの成長であった。挨拶やスピーチでも、日本復帰後に沖縄が得た物質的な利益が強調された。

このインフラ重視の演出は、中央政府の政策や「開発主義者」たちの思惑だけでなく、他の日本国民が沖縄をどう見ているかの反映でもあろう。つまり、沖縄県民以外にとって、那覇空港の二本目の滑走路やモノレールこそが現地の最初の接点であり、復帰後の沖縄との「つながり」なのだ。かくしてこのように現在の状態を重視するやり方は、歴史に目をつぶることをも意味する。沖縄独自の文化を重んじる姿勢や隣国と紛争の火種になっている島の領有を歴史でアピールする立場と対照的といえよう。要するに、復帰記念式典は、日本にとってのいまの沖縄の意味を見事に凝縮したイベントであった。

一九四五年以前の沖縄の歴史に触れないことで、琉球王朝と明治政府、いやそれ以前の本土との関係をめぐるデリケートな論争は回避される。メディアなどで、沖縄の人々の文化が歴史を遡って語られることはよくあるが、これを「日本としての沖縄」として真正面から議論されることはあまりない。これをやれば、日本にとっての沖縄の「固有性」が当然ながら疑われるからだ。

いわば、消された歴史とでもいえるこの点について、式典では玉城知事らから、批判的なコメントも寄せられた。米軍施設の沖縄への過度な集中、復帰から五〇年たっても経済・社会の面での沖縄の「後進性」などがそれだ。とはいえ、復帰以降の発展にもかかわらず、沖縄には

まだまだ注視すべき問題が残っているという認識として、これをとらえれば、天皇陛下のおことばや岸田首相の挨拶とさほど異なるものではない。大事な点は歴史ではなく、日本と沖縄が力を合わせて歴史を克服するというメッセージが、共有されていることだろう。奇妙なことに、メディアでは対立に力点が置かれがちな、首相と知事のメッセージも実は同じ方向を向いている。いわば、両者とも一九四五年以前の沖縄の政治とその責任を棚上げにしている。

「首里城」の変貌

復帰記念式典から読み取れる「記憶の境界」は、沖縄の現代と文化が出合う別の場所でも見ることができる。首里城がそうだ。琉球王朝の政治の中心舞台であった首里城は沖縄戦で完全に破壊され、米統治下の時期には琉球大学が置かれていた。その再建は一九八六年に発表され、一九九二年に正殿や北殿が完了したが、これもいわば戦後の終わりを告げる国家プロジェクトの一つといえた。この再建については「何の相談もなく、（内地からの）観光客向け」と住民たちからかなりの反対が寄せられた。二〇〇〇年にユネスコの世界遺産に登録されたものの（ただし、あくまで首里城跡であり、再建された城は含まれず）、二〇一九年一〇月三一日の火災で焼失すると、城の再建と文化的価値の復元を求める声が直ちに高まった。

二〇二一年三月、ビクトリア・ヤング（ケンブリッジ大学）、ラン・ツイゲンバーグ（ペンシルバニア州立大学）、そして私は首里城について Heritage from the margins? Shuri Castle and the Politics of Memory という会議を開催したが、この会議の議論においても、沖縄復帰記念式典で見られたような歴史と文化をめぐる曖昧さが散見された。参加者たちの打ち明け話によれば、一九八〇年代の首里城再建運動と異なり二〇一九年の火災ではこれを嘆く声が溢れ返り、地元

の人たちが、「沖縄の象徴」たる首里城に感情的に入れ込む様子に驚いたという。首里城といまの沖縄の人々の感情を説明するには、沖縄の過去の歴史に焦点を当てる必要がある。にもかかわらず、例えば今回の式典で、二〇二六年末に再建が完了すると述べた岸田首相のスピーチでは、日本と沖縄の歴史は触れられず、沖縄の文化遺産に対する日本政府の支援が強調されたのみであった。

結局、世界遺産の登録プロセスとは何だったのだろう。要は、文化への物質的な支援が日本の一部としての沖縄を際立たせ、これを世界に普遍的なものとしてアピールしようとしていた。この歴史を捨象した物語の創造は、沖縄の観光を含めた経済発展にも寄与した。翻って、首里城の視点から眺めれば、沖縄に関わる「記憶の境界」が見えてくる。これは単に沖縄対日本と二分できる枠組みではない。新たな歴史が生み出されていくプロセスともいえる。

一度出来上がったシンボルはそれ自身、独自の意味を持ち始める。戦後に再建された首里城が、その後、沖縄の人々に戦前の歴史を想起させたように、新たな城の再建は、分断された文化と歴史を再びつなぎ合わせ、地域の未来を切り開くシンボルとなる可能性を有する。文化遺産の空間をめぐる「記憶の境界」は、互いに対立や無関心であった異なるコミュニティ間のつながりを再建することにもなろう。城の焼失を受け、これらコミュニティ間の関係が変化し、刷新された象徴空間が生まれることを通じて、つながりもまた再創造される。

本稿で述べた、復帰五〇周年記念式典と首里城再建計画は、歴史の遺産や記憶に対する祝祭空間がどのような機能を持ち、どう社会と結びつくのかを読み解く貴重な素材である。「記憶の境界」という手法は、過去から未来への流れる事象への気づきとともに、沖縄に私たちがどのように向き合うべきかの示唆をも与えてくれる。

＊執筆にあたり、東京大学史料編纂所特任研究員サイフマン・トラビス氏、北海道大学公共政策大学院准教授池炫周直美氏、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授岩下明裕氏にお世話になりました。

（国際日本文化研究センター准教授）

コロナの隙をついて調査旅行

榎本　渉

この四月、鹿児島へ四日間、久しぶりの調査旅行に行ってきた。新型コロナウイルスの流行から二年、東京への日帰り調査はともかく、数日にわたる遠出の機会はなかなか得られなかった。感染状況もそろそろ落ち着いたかと思って計画を入れても、行く頃になると緊急事態宣言やまん延防止等重点措置の実施にぶつかり、中止を余儀なくされてきた。この鹿児島調査も、実に三度目の計画でようやく実現したものである。

今回は誰にも連絡せずに、一人で予定を立ち上げた。いつ感染が拡大するか分からない中で、行けると判断した時点で急ぎ動いたのである。鉄道のない地域のバス停の位置を確認し、一日数本のバス路線を利用した行程を検討するのは、パズルを解くような作業だったし、レンタサイクル利用予定の日に大雨の予報が出たことを受けて急遽日程を組み換えるなど、なかなか面倒は多かった。だが久々に調査に行けそうな気配の中で、私にはそれすらも楽しい作業であった。今回は研究の記録と言うよりは個人的な旅の備忘録として、見てきたものや体験してきたことの一部を摘記しておきたい。

今回の巡見地の内、現南さつま市の金峰町・加世田・坊津町については、大学院生時代の二〇〇一年に訪問したことがある。再訪の理由として、一つは注目すべき考古学上の発見が相次ぎ、それを踏まえた博物館の新設・刷新があったこと、一つはこの地域に散在する石造物が

対外交流を伝えるものとして評価されるようになったことがある。今回の調査は、こうした研究状況の変化を受けて、二〇年前には分かっていなかったことや見過ごしていたことを再確認しに行く旅だった。

二〇〇五年に設立された歴史交流館金峰は、今回の目的地の一つだった。平安後期〜鎌倉時代の宋・元代中国との貿易は、主に福岡県の博多津を窓口として行なわれたが、一九九〇年代に入り、薩摩半島の先端部（万之瀬川下流域の持躰松遺跡など）や奄美群島（奄美大島の倉木崎海底遺跡や喜界島の城久遺跡など）で、当該期の宋代の陶磁器片が数百〜数千点規模で出土する遺跡が次々と発見された。[1] 歴史交流館金峰は、万之瀬川下流域に位置する金峰町の発掘成果を踏まえ、外との交流を前面に押し出した博物館である。平安・鎌倉期の展示品では、やはり豊富な宋代の中国製陶磁器に目を引かれるが、国産品においても、徳之島のカムイヤキ、長崎県西彼杵半島の滑石製品、熊本県の樺番丈窯系の甕、畿内製の瓦器碗、愛知県常滑産の

薩摩半島南端部地図

陶器など、特定の地域で製作されたものや遠隔地の製品が目立つ。これらの遺物を踏まえてどのような流通路が想定できるか。たとえば宋から南九州まで直行する中国商船があったのか、一度博多に運ばれたものが沿岸航路を伝って運搬されたのか。研究者の間でもまだ共通の理解には至っていないが、当該期の日本列島の貿易構造を考える上で重要な問題である。

今回の調査の目的には、中世の中国系石造物の確認もあった。今年度、大谷大学の鈴木寿志氏とともに、文化地質学に関する共同研究会「日本文化の地質学的特質」を開催することになったため、それに先立って鹿児島の石造物を見て回っておきたかったこともある。調査対象の中心は薩摩塔である。これは九州の一部地域にのみ伝わる異形の石塔で、近年の研究によって、ほとんどが南宋・元代、一三～一四世紀の中国で作られたことが明らかになった。多くは赤味を帯びた特徴的な石材で作られており、中国浙江省の寧波で産する紫灰色凝灰岩の一種である梅園石と考えられている。[2] 寧波（当時は慶元）は日本向けの貿易港でもあり、薩摩塔は寧波から貿易船で運ばれた舶載品ということになる。半世紀前には旧薩摩国内のものしか知られていなかったため、薩摩塔と称するが、現在は鹿児島県域の旧大隅国内の他、福岡・佐賀・長崎県域でも多くの作例が報告されている。また薩摩塔の分布地域では、宋風獅子など他の中国系石造物も確認されている。その中には以前から知られていたものもあるが、舶載品という視点から注目されるようになったのは今世紀に入ってからである。

今回は諸般の事情で実見のかなわなかった石造物もあるが、多くは現地で確認することができた。博物館に移されているものもあり、たとえば南九州市のミュージアム知覧には、川辺町宝光院跡旧在の薩摩塔が常設展示されている。このたびこれを見るために同館を訪れたところ、川辺町の鎌倉期の文化財を展示する特別展「鎌倉頃の十三件」（タイトルは今年の大河ドラ

川辺町水元神社の薩摩塔（著者撮影）

マ「鎌倉殿の十三人」のパロディ）が開催されており、幸運にも普段非公開の宋風獅子の破片（薩摩塔のある川辺町の水元神社で近年発見された）も展示されていた。鹿児島の中国系石造物の多くは万之瀬川流域に分布しており、薩摩塔・宋風獅子が伝わる川辺町も万之瀬川の中流域に属する。川辺町では領主河辺氏の居館跡やその近くの馬場田遺跡からも一三～一四世紀を中心とする国内外の陶磁器が多く出土しており、その一部も展示されていた。これらは万之瀬川を通じて運ばれてきたに違いない。

かつて鹿児島の対外貿易港としては、坊津が第一に想定されてきたが、近年では、一四世紀頃までは万之瀬川流域が薩摩の主要な貿易拠点もしくは流通拠点だったと考えられている。だが坊津にも薩摩塔が一基伝来しており、一四世紀以前の坊津の対外交流の物証である可能性がある。これは坊津歴史資料センター輝津館に常設されており、他の薩摩塔と同様に赤い石材で作られていることも確認できた。実はこの塔は、以前訪問した時にも展示されていたらしい

（当時輝津館は坊津町歴史民俗資料館と言った）。だがその頃の私はこれを中国と関わる文化財と意識していなかったためか、見た記憶がない。文献も遺物も関心が向けられて初めて「資料」となること、関心の広狭が「資料」の多少に直結することを痛感させられた。

以上は博物館訪問の話だが、寺院・居館跡や遺跡の場所に赴いて、古地図や地形図を見ながら立地条件を確認することも、大きな意味がある。たとえば金峰町の南の加世田には、唐仁原（唐人原とも）・唐仁塚（都人塚とも）・当房（唐房とも）など中国との関連を思わせる地名が多い。これを宋人の居留に由来する地名と考える説もある。[3] 土地の記憶を考える時に、現地に立って周囲の旧道・古寺社との位置関係や遺跡との距離感を体感することは、必ずしも「成果」に直結はしなくとも、研究に深みを与えてくれるものである。

踏査に当たっては一応スケジュールを立てて行動したが、なかなか予定通りにならないのが旅の常であり、また醍醐味でもある。一例として、金峰町で観音寺跡の周辺の山道を踏査した時のことを書こう。観音寺は平安末期から室町期に金峰町域（当時は阿多郡）を支配した阿多氏・鮫島氏・二階堂氏が保護した寺院である。寺跡の周りには山道がめぐらされているが、その中に唐船塚という、いかにもいわくありげな字名を持つ場所がある。何もないとは思いながら散策してみたところ、偶然草刈りをしていた一人の老人に出会った。こんなところを一人で歩くよそ者の中年男性に、老人は大変驚いたようだが、私の目的を話すと安心して、このあたりの地理や昔の話などを聞かせてくれた（唐船塚の情報は得られなかったが）。話好きな方で、一つのことを聞き出すまでの長時間別の話を聞いたりもしたが、万之瀬川流域から海を経て野間岳まで見渡せる場所まで連れて行ってくださったのは大変ありがたかった。きっとこの寺の保護者だった中世阿多郡の領主は、寺僧を通じて万之瀬川への船の出入りを知ることができた

のだろう。結局観音寺跡での滞在は予定より一時間も長くなり、乗るつもりのバスも逃してタクシーを利用することになったが、思えば見知らぬ土地で見知らぬ人とコミュニケーションを取ることなど、何年ぶりのことか。この出会いにタクシー代三千円は高くない。

坊津町では港を歩いている時、何を探しているのかと、一人の親切そうな老人から声をかけていただいた。私が探していたのは港の墓地である。そこに福井県の日引石（ひびきいし）製の石塔があるとの情報を得ていた。日引石製の石造物は中世の日本海交通の要地に点在し、中世海運の広がりを伝える物証だが、坊津町はその南端に当たる。お目当ての地図は二次元の地図ではさほど遠くないように見えたが、老人に聞くと、切り立った崖の上にあることが判明。三次元にすると相当の時間がかかりそうである。この日はすでに移動や他所の調査で時間を取られていたため、楽しみにしていた港での昼食を抜いても時間はほとんど残されておらず、崖の上の墓地は諦めざるを得なかった。だがさらに悔しいことに、この老人は他にも色々な見どころを知っているらしい。聞けば港で民宿を経営しているとのこと。その民宿は当初私が宿泊しようとして連絡したが断られたところであった（コロナ対策のため二室で満室とされた）。これは是非また再訪して話を聞かねばなるまい。後ろ髪を引かれつつ、私は港を後にした。

こういう現地調査を気軽にできる日々も、そろそろ戻ってくるのだろうか。

（国際日本文化研究センター准教授）

1　『古代文化』五五―二・三号の特集「一一～一五世紀における南九州の歴史的展開」（二〇〇三年）、『貿易陶磁研究』四〇号の特集「南九州から奄美諸島の貿易陶磁」（二〇二〇年）など。

2　桃崎祐輔・山内亮平・阿部悠理「九州発見中国製石塔の基礎的研究」（『福岡大学考古資料集成』

四、二〇一一年）、井形進『薩摩塔の時空』（花乱社選書、二〇一二年）、橋口亘「薩摩南部の中世考古資料をめぐる諸問題」（『鹿児島考古』四四、二〇一四年）、井形進編『九州に偏在する中国系彫刻についての基礎的研究』（科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書、二〇一八年）、大木公彦・高津孝「浙江石材と日本中世」（市村高男編『中世石造物の成立と展開』高志書院、二〇二〇年）。

3　柳原敏昭『中世日本の周縁と東アジア』（吉川弘文館、二〇一一年）。

「刹那滅」と「純粋持続」とは輪廻転生／永劫回帰の無限小の「転轍機」、メビウスの帯の表裏をなすのか？
―木岡伸夫『瞬間と刹那　ふたつのミュトロギー』（春秋社、二〇二二年二月一五日）を出発点として

稲賀繁美

西欧に発展した論理形式は、同一律・矛盾律・排中律を基礎とする。これは自然科学の探求においても前提とされ、そこに疑義を挟む研究者は少ない。逆にこの枠組に抵触する思索は、哲学的思惟としても、しばしば市民権を剥奪される。例えばAかつ非Aを容れる「容中率」を思索したルーマニア出身のステファノ・リュパスコは、学会から黙殺された、という（本書三五）。だがこうした論理学の基礎に陥穽はないのか。矛盾律は、「Aかつ非A」は同時に同一の観測地点では成立しない、との前提に立つ。だが何光年も離れた物象同士の「同時性」を観測することは、同時性の根拠を掘り崩す。さらにその前提たる「同一律」が成立するためには、座標軸の数を限定する必要が生じる。そこから漏れた座標軸を採用すれば、同一だったはずの物体や命題は、容易に「同一性」の根拠を失う。単純な例だが、環境の温度が異なれば、物性は変化する。異なる環境下での再現実験は、厳密には再現の定義を満たさない。ここで再現実験を有効と見做す判断は、時間の反復可能性を無前提に認めている。換言すれば、自然科学の実験環境は、自然界の「永劫回帰」を信頼していることになる。

だが佛教でいう輪廻転生は、常識的には迷妄とされる。俗に言う「誰それの生まれ変わり」に根拠はあるまい。とはいえ数億光年離れた距離で同一の「並行宇宙」が存在しないことを、記号論理学は立証できない。同様に人間的尺度を超えた時間軸上に離れている複数の個体が「同一人格」であることを反証するのも不可能。ここまでくると、「同一」の根拠はその根底から揺らぐ。むしろ「同一」とは、もとより特定の認識の枠組みによる「認知」作業により「構成」される「虚構」と見たほうが、論理的に妥当する。人格的同一性は、立法者が認定を取り消せば、もはや法的有効性を失効する。さらに時間軸上での「同一性」の保証、即ち「純粋持続」も、観察者が「反復」を「差異」と知覚すれば、いとも容易に破綻する。

アキレウスの亀やゼノンの矢も同行だが、数列を任意の場所で切断すれば、その両端は定義からして異なる数値を取る。だが切断面は切断される以前には、同一の値を示していたはず。これは論理上の詭弁だが、同一性の保証は、実数の数列を裁断すれば、容易に喪失する。

ここに本書『瞬間と刹那』の領野が拓ける。佛教では「刹那滅」を説く。詳細は捨象するが、唯識であれば、事象は刹那に無に帰しては再生を遂げる。これは意識の次元で捉えるならば、なんら不思議ではない。視覚に限定しても、網膜に映った映像は、断片的で瞬時に動揺し消滅してゆく。ニューロンの発火はコンマ数秒遅延するが、それにも拘らず大脳が安定した持続映像を「同時現象」として知覚するのは、海馬が「錯覚」を「適正」に修正してくれるお陰である。いわば刹那に再発しつづける視覚細胞上の微小なる「輪廻転生」の連続が、「現実」という名の「虚像」を大脳に供給する。「持続した時間」というこの「迷妄」のお陰で、我々は日常生活を大過なく営んでいる。瀑布を落下する水は刻々と入れ替わるが、滝はその形状を持続する。またコマ割の映画も「持続」の錯覚を生む。——もはや明らかだろう。常識としての「持続」

する時間意識こそが、「錯覚としての現実」＝「迷妄」だった。

「刹那滅」における瞬時の邂逅と別離とにおいて「永劫回帰」は無際限に性起している。ここで「純粋持続」は「刹那」と表裏一体であり、「刹那滅」の瞬間に、いわばメビウスの帯のように不意に表裏を転換する。ここではもはや、過去から未来へと定流する通常の「時間の流れ」は無効となる。したがってこの機構に時間軸に拠る因果関係を当て嵌めることは、もとより整合性を欠く。実際、失敗の原因は事後に遡及的に推定しうるが、成功の理由は、往々にして説明を超える。カール・ポパーの「反証可能性」はこの事実を指す。さらに原因究明は次の事故阻止には必ずしも役に立たず、往々にして、かえってさらなる失策を誘発する。これは我々がしばしば体験する事態だが、ここには「因果律」の盲点が示唆されている。

南方熊楠は矛盾律や排中律の支配する「因果」の論理の外に「縁起」や「やり当て」の「不思議」を見たが、ここに「Aかつ非A」および「Aでも非A」でもない領野、二項対立が排除する第三項の「両是」「両非」に跨るtetra lemma即ち「四つ」の次元複合が視野に入ってくる。アリストテレス論理学が排除してきた「両是」「両非」がここで「把握」lambanoされる。山内得立『ロゴスとレンマ』（およびその仏文訳）を導きに、「ロゴス」の「裏」を支える「レンマ」に探りを入れよう。著者の精緻な論述を頼りに私見を弄するならば、九鬼周造の仏文講演「円環的時間論」に見える輪廻思想の再解釈、また大森荘蔵の「重ね描き」による過去の「立ち現れ」は、このレンマへの開口部を狙う。だがこれも私見では、九鬼の議論は詩的修辞の押韻の反復に古代の再来を幻視する「言霊論」へと退行し、大森の「過去の制作」をめぐる議論は、「刹那滅」への深入りを避ける傍ら、「重ね描き」における「うつし」を西洋近代語の「複製」に限定解釈したため、国学の語彙論的可能性を見落としている。

従来、比較思想は、東西哲学の不毛な対話不能の蹉跌を乗り越えようとしながら、期待される成果を容易には挙げなかった。「存在の本質」を問う西洋哲学と、佛教哲理の「空」や道教と習合した禅の「無」との間には、相容れない対立がある―。そうした原理的な二項対立 dilemma の認識が、東西の比較を、かえって相互排除の護教論的対立、動脈硬化へと導いてきた。だがどうだろう。例えば西田幾多郎の「絶対無の自己限定」（本書三〇二）は、ユダヤ思想のカバラーが説く「神の自己収縮」や、キリスト教神学に見る kenosis（神の自己空無化）と、論理的に表裏をなすのではないか。実際、「無」と「有」とに還元される東西対比は、ブール代数における0から1の間の数列の冪乗に関する思索へと媒介できる。「有」の極限たる「一者」と「無／零／空」との振幅として、数学的に「理詰め」な処理が可能だからである。

加えて、晩年の田辺元が「無即愛」を唱え、同じく晩年の西谷啓治が「無即空」を視野に収めたことも、この文脈で更に発展可能だろう。もはや詳述できないが、「東洋の迷妄・虚無」を排斥する呪縛から「輪廻転生」や「無／空」を解き放つ営為は、近年の山下善明 *Identität als Unverborgenheit*、伊藤武邦『九鬼周造と輪廻のメタフィジックス』、大橋良介『共生のパトス』をはじめとする思索や研究で共有されつつ浮上している。それは、別の文脈だが中沢新一『レンマ学』、小田龍哉『ニニフニ』に至る考察とも踵を接する。その傍らでは末木文美士・編『比較思想から見た日本仏教』、廖欽彬・伊東貴之・河合一樹・山村奨・編『東アジアにおける哲学の生成と発展』などの大規模な成果もあげられている。最後の論文集は副題に「間文化の視点から」と銘打つが、木岡氏の先著『〈あいだ〉を開く―レンマの地平』（二〇一四）、『邂逅の論理―〈縁〉の結ぶ世界へ』（二〇一七）が同様の志向に支えられた研究であったことも、歴然とする。以上、「文化伝播の器と蝕変の実相」を追求する、異分野共同研究会の成果論文集『映し

と移ろい』（二〇一九）の編者として、舌足らずは覚悟のうえで、今後の東西哲学の「切り結び」を確保するための〈場＝あいだ〉への期待を込めた鳥瞰を試みた。

二〇二二年三月一三日

（京都精華大学教授／国際日本文化研究センター名誉教授）

「文理」会通の夢——総研大の改革に臨んで

伊東貴之

国際日本文化研究センター（日文研）をはじめとして、人間文化研究機構に属する各基盤機関の大学院部門は、現在、他の理系の自然科学研究機構、高エネルギー加速器研究機構、情報・システム研究機構の四つの大学共同利用機関法人に属する一六の研究所、並びに、国立研究開発法人・宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所とともに、神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）に本部のある国立大学法人・総合研究大学院大学（略称・総研大）を構成している。また、現状では、人間文化研究機構に属する各基盤機関のうち、大学院を有するのは、国立歴史民俗博物館（歴博）、国文学研究資料館（国文研）、私ども日文研、並びに、国立民族学博物館（民博）の四機関であり、それぞれ大学院の専攻としては、総研大の文化科学研究科の日本歴史、日本文学、国際日本研究、そして、民博のみ、地域文化学、並びに、比較文化学の二専攻を有している。総研大の研究科としては、この文化科学研究科のほか、物理科学研究科、高エネルギー加速器科学研究科、複合科学研究科、生命科学研究科、先導科学研究科の理系の五研究科があって、それらの傘下に、文理を合わせて、全二〇専攻を擁している。詳細については、左記の総研大のサイトを御高覧願いたい。

国立大学法人 総合研究大学院大学（soken.ac.jp）

さて、その総合研究大学院大学（総研大）は、二〇二三（令和五）年四月より、これまでの教育体制を見直し、如上の全ての研究科を統合して、先端学術院・先端学術専攻という一学術院・一専攻に改組されて、その傘下に、現在の各専攻に当たる各コースが存在する二〇コース体制となって、新たに生まれ変わる。但し、学位審査などの必要からも、文化科学・数理情報科学・物理科学・生命科学という、緩やかな四つの領域は残ることになる。此方に関しても、委細は、左記の総研大のサイトを御覧頂きたいが、現在の各専攻の後継となる二〇コースについても、まずは、文化科学の領域、ないしは、人間文化研究機構を構成する基盤機関から見ても、国立民族学博物館（民博）の二専攻（地域文化学・比較文化学）が統合されて、コース名は、人類文化研究となるほか、新に国立国語研究所（国語研）と総合地球環境学研究所（地球研）が、大学院を立ち上げて、日本語言語科学、総合地球環境学というコースをそれぞれ創設する予定である。因みに、前述した四領域のうち、前者は、文化科学と数理情報科学、後者は、物理科学と文化科学というように、文理の双方に跨がる研究・教育領域を担うことになる。理系の方でも、分子科学系の二専攻（構造分子科学・機能分子科学）が、分子科学コースに統合されるほか、先導科学研究科の生命共生体進化学専攻が、統合進化科学コースに改編されるなど、若干の異同があるが、総計・二〇コース体制として、再出発するとともに、同じく幾つかの領域に跨がるコースが生じるなど、総研大が標榜する学際性や文理融合的な姿勢が、更に顕著に体現される仕儀ともなっている。（――以上、左記サイトを参照）

国立大学法人 総合研究大学院大学 先端学術院（https://next20.soken.ac.jp/）

なお、目下は、この改編を目指して、総研大を挙げて、鋭意取り組んでおり、半ば私事に亘っ

て、甚だ恐縮の至りではあるが、偶々筆者も、昨年来、拝命した文化科学研究科長職のために、及ばずながら、その一端を担っている訳である。もっとも、筆者としても、研究科長職を拝命して早々に、このいわば一研究科構想とも言える、先端学術院・先端学術専攻という、一学術院一専攻への統合という、些か途方もない構想案に接して、率直に申し上げて、甚だ戸惑ったことは、言うまでも無いであろう。何しろ総研大は、幅広く文理の様々な研究分野を包括しており、それが、文理の垣根を越えて、一つの専攻へと統合されるという、壮大な改革である。事実、文科の教員の中には、理系主導の改革という見方も多かったし、理系の先生方の間でも、この改革案に対しては、様々な意見があり、かなりの温度差があるようにも拝察された。新に発足する学術院の名称に関しても、筆者の記憶が正しければ、当初は、複合科学や先導科学といった呼称も、複数ある案のうちの一つとしては提起されたものの、現在、存在する研究科の名称とも重なるため、見送られる仕儀となった模様である。

ところで、慥かに「先端学術」という名称は、善かれ悪しかれ、如何にも理系の研究者の方々の理想や願望が、その背景に存するという見立ても、強ち間違いとは言えないであろう。ここで、些か皮肉な物言いを容赦して頂くなら、生粋の（？）文系の筆者などは、「先導」と聞いて、故・古井由吉氏の初期の佳編『先導獣の話』をつい思い浮かべてしまったし、「先端」や「先導」などと称するのは、やはり何と言っても、研究成果のプライオリティー競争を重んじる理系の発想で、人文系や更には藝術系であれば、その内実を問題として、むしろ「前衛」と称することを望む人々も多くおられようし、また、広く文系の場合には、そうした先進性なり、有用性を誇示することを嫌って、逆に殊更に「虚学」であることを誇ったり、社会的にも「後衛」の位置に身を置くことに、かえって存在価値を見出す向きもあろう（―丸山眞男『後衛の

位置から』！）……。

しかるに、筆者自身、様々な会議を通じて、この大幅な改組の理念や実態を少しずつ知り得る立場になってみて、それなりに、そこに籠められた意図を理解することが出来るようになった。最もドラスティックな改変は、一専攻への統合ということとも相俟って、現在、各研究科ごとに行われている教授会や専攻長会議が廃されて、葉山の総研大本部と各コースとが、直接にリンクされるようになる点である。このことは、いわばトップダウンとボトムアップとが、双方向的に上手く機能し得ることを目指したもので、それと同時に、現状でも、最前線の教育現場である各専攻改め各コースの自立性や立場を最大限に尊重して、良い意味での現状維持を図ろうとする配慮もある。その意味では、一見、中央集権的（郡県制!?）に見えて、地方分権（封建制!?）にも、意が用いられて、両者のバランスが目指されているとも言えよう。もっとも、その中間にある前述した四領域ごとの各領域会議なども含めて、こうした改組が、上手く機能して、改革の実を結ぶか否かは、むしろ実際の運用の如何に係っているとも言えるのであって、発足の後にも、様々な微修正などは、必須になるものと思議している次第である。時には、歩きながら考える、ということも、必要な所以である。

以上は、実質的な運用の局面の話であるが、その理念については、如何であろうか？既に示唆した如く、やはり総研大が掲げる研究・教育上の理念のうち、学際性や総合性、いわば文理融合的な要素も含む、広く領域横断的な研究・教育の推進、また、そうした方向性を担い得る知性の涵養という、見方によっては、やはり途方もない改革案でもあり、途轍もない理想論とも言えよう。因みに、この学際性や総合性に、国際性を加えれば、まさに私ども日文研の理念とも重なるが、日文研の共同研究会においても、先年来のワーキングなどを通じて、いわば文

理融合的な研究姿勢も模索されて、「自然観と人間観」というカテゴリーも案出されたが、その折には、文理の単なる「融合」という考え方や「融通」といった語彙が忌避されて、文理の「相通」という語彙や理念に収斂した次第である。この点に関しては、飽くまでも卑見ではあるが、また、現代では、些か馴染みがないかも知れないが、『易』繫辞上傳に典拠があり、物事が相通じ合い、一緒になった後に、変化するという、「会通」という語彙や概念の方が、より理想とする実態には、相応しいものと愚考している。すなわち、相互の交通とともに、その結果として、一種の化学反応を期待するという意味においてである。

それはさておき、現代においては、地球環境問題や資源問題、持続可能な開発目標といった、人類史上の困難な問題に直面して、最早、反文明的で空想論的な態度では、対処することは不可能であり、自然科学や科学技術の叡智を多分野横断的に総結集すべきことは、言を俟たない。だがそれと同時に、環境倫理や生命倫理などを持ち出すまでもなく、自然科学や科学技術の行き過ぎや負の側面にも留意しながら、それを応用するための人文学や社会科学的な知見や賢慮もまた、必須のものと考えられる。また、偶然ではあるが、総研大の理系の場合、総じて基礎科学的な分野が優勢なように思われるが、このことは、その実、人類史的に見ても、諸学問の成り立ちや来歴から鑑みるに、存外、文系との相性も良いのでなかろうか?…。ここで、敢えて大風呂敷を広げるなら、「驚き」を純粋な知的探究の出発点と考えたアリストテレスにとって、自然学や自然哲学を基礎としつつも、哲学や形而上学、人間や社会に関わる政治学や倫理学などは、むしろ一繋がりのものとして、観念されていたし、この点では、洋の東西を問わず、例えば、古代中国の経書の学問観やその後の朱子学の世界観なども、概ねそうした自然と人間社会とを通貫する思惟を共有していた。リベラル・アーツの語源とされ、古代ギリシア・ロー

マに淵源する、いわゆる自由学芸も、中世期においては、神学部・法学部・医学部といった、専門家養成や資格取得を主眼とする学部に進む以前の基礎教養として、広く位置づけられていたが、更に後のパリ大学などでは、こうした在り方に対する一定の批判や反省として、むしろ純粋に知的な探究を旨とする文理学部（文学部と理学部）が創設されたといった、学問史・大学史の基礎を振り返っておくこともまた、強ち時代錯誤とは言えまい。

なお、現代の様々な趨勢の中で、些か劣勢にも見える、人文社会科学、取り分け、人文基礎学の存立意義が奈辺にあるかについては、最早、紙幅も尽きており、別の機会（中国社会文化学会ＨＰ）に、現代詩人の荒川洋治氏の「文学は実学である」（『忘れられる過去』、みすず書房、二〇〇三年、所収）という美しい文章を引証しつつ、卑見を述べた経緯もあるので、御関心の向きにおかれては、別途、そちらを御参看願えれば、幸いである。（――以上、左記サイトを参照）

中国社会文化学会（www.l.u-tokyo.ac.jp/ASCSC/）

中国社会文化学会会長挨拶（www.l.u-tokyo.ac.jp/ASCSC/goaisatsu.html）

（国際日本文化研究センター教授）

録』（監修）国際日本文化研究センター　2022年3月　57頁

●論文

「報告5　アジアにつながる地域文化―上海・長崎・大阪という文化街道」西村慎太郎、木部暢子、吉田丈人、川村清志、劉建輝、日高真吾著／高科真紀、セリック・ケナン編『新しい地域文化研究の可能性を求めて』Vol.10 弘文社　2021年11月　64頁～74頁（依頼論文）

「生態・移民・鉄道―準備されていた満洲の近代」李暁東、李正吉編著『北東アジアにおける近代的空間―その形成と影響』明石書房　2022年3月　220頁～231頁（依頼論文）

「生態・移民・鉄道―満洲「近代」的形成軌跡」（中国語）李暁東、李正吉主編『東北亜近代空間的形成及其影響』秀成資訊科技股份有限公司（台湾）　2022年3月　161頁～170頁

●その他の執筆活動

「失われた『絆』を再構築することが日中相互理解への第一歩」『日本人の忘れ物　知恵会議』京都新聞出版センター　2021年6月

インタビュー「春秋」『日本経済新聞』　2021年7月1日

インタビュー「文化時評　従軍画家の絵はがきが語る誘惑」『日本経済新聞』（日曜版）　2021年8月22日

インタビュー「従軍画家が見た大陸の日常―日中戦争時の絵はがき　浮かぶ世相・風俗」『朝日新聞』（夕刊）　2021年8月23日

「序文」（中国語）陳月娥著『従文化苦旅到鳳凰涅槃―日本漢字問題与語言政策研究』中国社会科学出版社　2021年12月

インタビュー「『忠臣蔵』本が中国で売れる理由　格差社会で『復讐劇』に注目？」『朝日新聞』（夕刊）　2022年1月27日

※本誌に掲載している業績は、日文研に在籍している期間のみの業績です。（年度途中で着任する以前の業績や退職後の業績については掲載しておりません。）

7月　302頁
『일본대중문화와 내셔널리즘［日本大衆文化とナショナリズム］』（박순애と共編著）지식과교양　2021年10月　395頁（韓国語）
●論文
「みる／みられる自由・権利・義務――それらに関わる法と現在」高馬京子、松本健太郎『〈みる／みられる〉のメディア論―理論・技術・表象・社会から考える視覚関係』ナカニシヤ出版　2021年4月　173頁～184頁（依頼論文）
「프롤로그 대중문화와 내셔널리즘의 깊은 관계」박순애、야마다쇼지『일본대중문화와 내셔널리즘』지식과교양　2021年10月　3頁～8頁（依頼論文）
「『正徳ひな形』のデータ分析」石上阿希、加茂瑞穂編『西川祐信「正徳雛形」』臨川書院　2022年3月　411頁～417頁（依頼論文・査読付き）
●その他の執筆活動
「妖怪データベースの使われ方」「パネル討論・妖怪研究から文化創造へ（小松和彦、安井眞奈美、南郷晃子と）」「妖怪データベースの回顧と展望」「妖怪データベースの創造――妖怪プロジェクト室かく闘えり」小松和彦、安井眞奈美、南郷晃子編『妖怪文化研究の新時代』せりか書房　2022年3月
「国立国会図書館デジタル化資料等の海外送信・その後」「国際日本研究」コンソーシアム編［荒木浩、白石恵理、松木裕美、ゴウランガ・チャラン・プラダン］『After/With コロナの国際日本研究――パネル発表「ヨーロッパからの報告」を受けて』国際日本文化研究センター　2022年3月
「ビールのCMはなぜ各社似ているのか」『週刊女性PRIME（WEB媒体）』 2021年12月
インタビュー「著作権強化は、創造の妨げも」「「縮小社会」の影響、可能性を探る」『京都新聞』 2022年3月18日

マルクス・リュッターマン
●論文
「『良心』を考える」「国際日本研究」コンソーシアム編［荒木浩、白石恵理、松木裕美、ゴウランガ・チャラン・プラダン］『After/With コロナの「国際日本研究」――ヨーロッパからの報告』国際日本文化研究センター　2022年3月　103頁～118頁

劉　建輝
●著書
『戦時下の大衆文化―統制・拡張・東アジア―』（石川肇と共編）KADOKAWA　2022年2月　384頁
『写真・絵葉書からみる戦前のスポーツ―2021日文研一般公開所蔵資料展示図

安井　眞奈美

●著書

『身体の大衆文化　描く・着る・歌う』（エルナンデス・アルバロと共編著）KADOKAWA　2021年11月　352頁

『「身体イメージの創造　感染症事態に考える伝承・医療・アート」図録』（ローレンス・マルソー、伊藤謙と共編著）国際日本文化研究センター　2022年1月　64頁（複数言語）

『狙われた身体――病いと妖怪とジェンダー』平凡社　2022年2月　276頁

『妖怪文化研究の新時代』（小松和彦、南郷晃子と共編著）せりか書房　2022年3月　312頁

●論文

「ムラの変遷を追う――能登半島の「ツラ」について」川村清志、高科真紀編『七浦から世界へ――調査・研究・活用としてのフィールド』大学共同利用機関法人人間文化研究機構、国立歴史民俗博物館　2021年7月　28頁～47頁（依頼論文）

「日本民间信仰中的身体描画与形塑：兼论与妖怪图像之关联」（翻訳：姜姗）『中医典籍与文化（2021年第二辑　总第3期）――东亚医学思想与流转』2021年12月　社会科学文献出版社　64頁～78頁（依頼論文）

「願いを絵に託す――近現代の小絵馬」『身体の大衆文化　描く・着る・歌う』（著書欄参照）213頁～246頁

「After/With コロナの国際日本研究――パネル発表「ヨーロッパからの報告」を受けて」「国際日本研究」コンソーシアム編［荒木浩、白石恵理、松木裕美、ゴウランガ・チャラン・プラダン］『After/With コロナの「国際日本研究」――ヨーロッパからの報告』国際日本文化研究センター　2022年3月　119頁～134頁（依頼論文）

●その他の執筆活動

「コロナ禍のお産――妊産婦と家族にとっての「思いがけないお産」」（中本剛二、伏見裕子と共著）『日本民俗学』307　日本民俗学会　2021年8月

インタビュー「新冠肺炎疫情下的日本妖怪学研究（刘晓峰と）」（中国語）『中国社会科学報（オンライン）』中国社会科学网　2021年6月

インタビュー「人コミュ通信 vol.17　特別展「身体イメージの創造　感染症時代に考える伝承・医療・アート」にかける想い――本展企画者・安井眞奈美教授にお話をうかがってきました」『国際日本文化研究センターウェブサイト』国際日本文化研究センター　2022年2月

山田　奨治

●著書

『著作権は文化を発展させるのか―人権と文化コモンズ』人文書院　2021年

판　2022年3月　667頁～697頁（依頼論文）

「大韓帝国期漢城的自来水管道建設―従其與殖民地都市「京城」的二重構造論的関連説起」李暁東・李正吉編『東北亜的近代空間的形成及其影響』秀威資訊科技股份有限公司　2022年3月　399頁～419頁（依頼論文）

●その他の執筆活動

「民族運動抑えつつ同化図る」赤旗編集局編『日韓の歴史をたどる 支配と抑圧、朝鮮蔑視観の実相』新日本出版社　2021年4月

書評「植野弘子、上水流久彦編『帝国日本における越境・断絶・残像―人の移動』『帝国日本における越境・断絶・残像―モノの移動』（風響社、2020年2月）」『日本植民地研究』第33号　日本植民地研究会　2021年6月

書評「飯倉江里衣『満洲国軍朝鮮人の植民地解放前後史―日本植民地下の軍事経験と韓国軍への連続性』（有志舎、2021年）」『図書新聞』3503号　2021年7月

「共同研究「植民地帝国日本とグローバルな知の連環」」『NICHIBUNKEN NEWSLETTER』国際日本文化研究センター　2021年10月

項目執筆「京都府協和会、他2件」（韓国語）『在日朝鮮人団体事典』民族問題研究所　2022年2月

光平　有希

●著書

『企画展「明石博高―京都近代化の先駆者」図録』（松田清、フレデリック・クレインスと共編著）国際日本文化研究センター　2022年3月　36頁

『ポップなジャポニカ、五線譜に舞う―19世紀～20世紀初頭の西洋音楽に描かれた日本―』（編著）臨川書店　2022年3月　306頁

●論文

「昭和前期の松沢病院にみる「慰楽」―治療と日常のあいだに響く音」細川周平編著『音と耳から考える―歴史・身体・テクノロジー』アルテスパブリッシング　2021年10月　226頁～241頁

●その他の執筆活動

「『蝶々夫人』だけではなかった 音楽のジャポニスム～京都市立芸術大学のセミナーをレポート」『オンラインマガジン「ほとんど0円大学」』株式会社hotozero　2022年2月

「感染症流行期にみる『音』・『音楽』を介在したコミュニケーションの今昔」『人間文化研究機構ホームページ（コロナ時代を生き抜く―くらしに人文知）』人間文化研究機構　2022年3月

「口絵解説　カール・アドルフ・フローレンツ『極東からの詩の挨拶：日本の詩（英文和哥集）』」『日本研究』国際日本文化研究センター　2022年3月

『〈キャラクター〉の大衆文化 伝承・芸能・世界』（著書欄参照）131頁～153頁

松木　裕美

●著書

『イサム・ノグチの空間芸術　危機の時代のデザイン』淡交社　2021年4月　256頁

『After/With コロナの「国際日本研究」――ヨーロッパからの報告』（「国際日本研究」コンソーシアム編［荒木浩、白石恵理、松木裕美、ゴウランガ・チャラン・プラダン］）国際日本文化研究センター　2022年3月　267頁（複数言語）

『世界の日本研究』2021（編）国際日本文化研究センター　2022年3月　85頁（複数言語）

●その他の執筆活動

インタビュー「『イサム・ノグチの空間芸術』刊行記念インタビュー　危機をきっかけに、デザインで価値観を変える」『淡交』937号　淡交社　2021年8月

「口絵解説：ジャパニーズ・ティー・ガーデン（サンフランシスコ）」『日本研究』第63集　国際日本文化研究センター　2021年10月

“Fountain of Peace and Japanese Garden” and “Interview with Motonori Suzue” Nuria Sanz ed., *UNESCO Art Collection*, UNESCO, November 2021.

松田　利彦

●著書

『帝国のはざまを生きる――交錯する国境、人の移動、アイデンティティ』（蘭信三、李洪章、原祐介、坂部晶子、八尾祥平と共編著）みずき書林　2022年3月　726頁

●論文

「日本赤十字社と朝鮮―日清戦争期から韓国併合まで」『年報朝鮮学』第24号　2021年12月　1頁～30頁（査読付き）。

「1950年代末～1960年代日本における韓国人の朝鮮統一運動―『統一朝鮮新聞』の分析を軸に」『帝国のはざまを生きる――交錯する国境、人の移動、アイデンティティ』（著書欄参照）409頁～441頁（依頼論文・査読付き）

「大韓帝国期漢城における水道建設―植民地都市「京城」の二重構造論との関連から」李暁東・李正吉編『北東アジアにおける近代的空間―その形成と影響』明石書店　2022年3月　505頁～527頁（依頼論文）

「대한제국기 한성의 수도 건설: 식민지 도시 경성의 이중 구조론과의 관련으로부터」리샤오동・이정길編『동북아 근대공간의 현성과 그 영향』소명출

頼論文）
「荒地を荒地として生きること、他対話１～５（酒井直樹と）」現代詩手帖編集部編『現代詩手帖』2021年８月号～2022年３月号　思潮社　2021年７月～2022年２月　48頁～62頁、他
「権力と告白――〈更生〉につながれる転向の物語」日本社会文学会編『社会文学』第54号　日本社会文学会　2021年８月　52頁～64頁（依頼論文）
●その他の執筆活動
「〈戦後〉の再審のために」『NICHIBUNKEN NEWSLETTER』国際日本文化研究センター　2022年２月

平松　誠
●その他の執筆活動
「日本と世界の距離」『NICHIBUNKEN NEWSLETTER』国際日本文化研究センター　2021年11月

エドワード・ボイル
●論文
“Shifting borders of memory: Japan’s Industrial Heritage Information Centre” Yujie Zhu, William Logan, eds., *Journal of Cultural Heritage Management and Sustainable Development* 12.1, emerald publishing, January 2022, pp. 19–31.（依頼論文・査読付き）
●その他の執筆活動
「Borders and Interfaces: Creating Connections in a Fragmented World（境界と接点：分断された世界をつなぎなおす）」『NICHIBUNKEN NEWSLETTER』国際日本文化研究センター　2021年12月
“Imagined Geographies in the Indo-Tibetan Borderlands: Culture, Politics, Place, by Swargajyoti Gohain, Amsterdam, Amsterdam University Press, 2020,” *South Asia: Journal of South Asian Studies*, 45(2), February 2022.

前川　志織
●著書
『〈キャラクター〉の大衆文化 伝承・芸能・世界』（荒木浩、木場貴俊と共編）KADOKAWA　2021年11月　376頁
●論文
「キャラメルの喩えとしての子ども―戦間期日本の洋菓子広告と童画風図案」大塚英志編『運動としての大衆文化　協働・ファン・文化工作』水声社　2021年９月　93頁～112頁
「「キャラクター」としての麗子――画家・岸田劉生の《麗子像》連作から」

瀧井　一博

●著書

『「歴史の黄昏」の彼方へ―危機の文明史観』（野田宣雄著、竹中亨、佐藤卓己、植村和秀と共編）千倉書房　2021年11月　528頁

●論文

「大久保利通と立憲君主制への道」明治神宮国際神道文化研究所編『神薗』26 明治神宮国際神道文化研究所　2021年11月　1頁～16頁（依頼論文）

●その他の執筆活動

「中国の弁当箱（現代のことば）」『京都新聞』（夕刊）　2021年4月14日

「政治学の古典を読む（三五）明治憲法史の大きな壁（稲田正次『明治憲法成立史』上下、有斐閣、一九六〇年、一九六二年）」『究』第122号　ミネルヴァ書房　2021年5月

「政治学の古典を読む（三六）政治学の体系（アリストテレス、牛田徳子訳『政治学』、京都大学出版会、二〇〇一年）」『究』第125号　ミネルヴァ書房　2021年8月

「政治学の古典を読む（三七）国家の公益と政治家の私益（マイネッケ著（岸田達也訳）『近代史における国家理性の理念』I、II、中公クラシックス、二〇〇一年）」『究』第128号　ミネルヴァ書房　2021年11月

「政治学の古典を読む（三八）体系化する精神（磯村哲『社会法学の展開と構造』日本評論社、一九七五年）」『究』第131号　ミネルヴァ書房　2022年2月

坪井　秀人

●著書

『対抗文化史　冷戦期日本の表現と運動』（宇野田尚哉と共編著）大阪大学出版会　2021年10月　370頁

『戦後日本の傷跡』（編著）臨川書店　2022年2月　376頁

●論文

「路上の詩想―寺山修司と〈1968〉」『対抗文化史　冷戦期日本の表現と運動』（著書欄参照）183頁～201頁

“Anorexia Speaks: Eating Disorders in Modern Japanese Films, Novels, Manga, and Poetry” Gérard Siary, Toshio Takemoto, Victor Vuilleumier et Yinde Zhang, eds., *Le corps dans les littératures modernes d'Asie orientale: discours, représentation, intermédialité*, Collège de France, February 2022, PP. 1.（依頼論文）

「妻の崩壊――傷跡としての『成熟と喪失』」『戦後日本の傷跡』（著書欄参照）321頁～333頁

「故郷とは子ども時代のこと――歌のなかの安野光雅」ユリイカ編集部編『ユリイカ』2021年7月臨時増刊号　青土社　2021年6月　275頁～291頁（依

白石　恵理

●著書

『After/With コロナの「国際日本研究」――ヨーロッパからの報告』（「国際日本研究」コンソーシアム編［荒木浩、白石恵理、松木裕美、ゴウランガ・チャラン・プラダン］）国際日本文化研究センター　2022 年 3 月　267 頁（複数言語）

●論文

「蓮月と松浦武四郎―京と蝦夷、文化・情報の邂逅」北海道大学芸術学研究室編『アートと、そのあわいで―北村清彦教授北大退職記念論集』中西出版　2021 年 5 月　84 頁～ 91 頁

“Fictitious Images of the Ainu: *Ishū Retsuzō* and Its Back Story,” John Breen and Edward Boyle, eds., *Japan Review*, vol. 36, International Research Center for Japanese Studies, February 2022, pp. 89–109.（査読付き）

●その他の執筆活動

書評「ロバート・T・シンガー、河合正朝編『日本美術にみる動物の姿』」『日本研究』第 64 集　国際日本文化研究センター　2022 年 3 月

タイモン・スクリーチ

●その他の執筆活動

「Research Interests（研究関心事の変遷）」『NICHIBUNKEN NEWSLETTER』国際日本文化研究センター　2021 年 12 月

関野　樹

●論文

「期間同士の関係に基づくあいまいな時間データの精緻化」じんもんこん 2021 プログラム委員会編『情報処理学会シンポジウムシリーズ じんもんこん 2021 論文集』情報処理学会　2021 年 12 月　2 頁～ 9 頁（査読付き）

“Refinement of uncertain temporal data based on relations between time intervals.”, PNC 2021 Program Committee ed., *Proceedings of the 2021 Pacific Neighborhood Consortium Annual Conference and Joint Meetings (PNC)*, IEEE, January 2022.（査読付き）

●その他の執筆活動

解説「研究基盤データの役割と活用」『総合資料学の創成 ニューズレータ』11 号　国立歴史民俗博物館　2021 年 10 月

「人文学研究におけるオンライン上の研究資源―現状と課題」「国際日本研究」コンソーシアム編［荒木浩、白石恵理、松木裕美、ゴウランガ・チャラン・プラダン］『After/With コロナの「国際日本研究」――ヨーロッパからの報告』国際日本文化研究センター　2022 年 3 月

聞』 2021年6月26日
「「解説」に代えて」『王朝貴族の実像1　王朝再読』（著書欄参照）
「古代の戦乱」『新説　戦乱の日本史』（著書欄参照）
書評「関幸彦著『刀伊の入寇』（中公新書）」『産経新聞』 2021年9月19日
「ちょっといい話」一心寺編『ちょっといい話〈第15集〉各界名士による心洗われるお話』15　東方出版　2021年10月
「邪馬台国の外交と戦争」『歴史道』vol.18　朝日新聞出版　2021年11月
「平安京のある下級官人」『講談社現代ビジネス』 講談社　2022年1月

フレデリック・クレインス

●著書
『企画展「明石博高―京都近代化の先駆者」図録』（松田清、光平有希と共編著）国際日本文化研究センター　2022年3月　36頁

●その他の執筆活動
「鍾馗さんと聖母マリアの共通点（現代のことば）」『京都新聞』 2021年5月21日
「鴨川の涼を求めて（現代のことば）」『京都新聞』 2021年7月12日
「長崎奉行葬列図（ティツィング『日本風俗図説』パリ、1819年）」『日文研』66号　国際日本文化研究センター　2021年9月
項目執筆「ドドネウス『草木誌』」青木歳幸、他編『洋学史研究事典』 思文閣出版　2021年9月
「二条室町のオランダ人（現代のことば）」『京都新聞』 2021年9月9日
「誤記の謎と新発見（The Mystery of an Error and a New Discovery）」『NICHIBUNKEN NEWSLETTER』国際日本文化研究センター　2012年11月
「京都人の会話術（現代のことば）」『京都新聞』 2021年11月19日
「雪景色の京都（現代のことば）」『京都新聞』 2022年1月28日
項目執筆「会員機関紹介②　総合研究大学院大学　文化科学研究科国際日本研究専攻」「国際日本研究」コンソーシアム編［荒木浩、白石恵理、松木裕美、ゴウランガ・チャラン・プラダン］『After/With コロナの「国際日本研究」――ヨーロッパからの報告』国際日本文化研究センター　2022年3月
「京都の桜熱（現代のことば）」『京都新聞』 2022年3月31日

呉座　勇一

●論文
「在地領主法」日本史史料研究会・松園潤一朗編『室町・戦国時代の法の世界』吉川弘文館　2021年6月　61頁～74頁（依頼論文・査読付き）

楠　綾子

●論文

「冷戦下の日本外交の出発点　事例：サンフランシスコ講和条約・日米安全保障条約の選択」大矢根聡編『戦後日本外交からみる国際関係―歴史と理論をつなぐ視座』ミネルヴァ書房　2021年4月　3頁～11頁（依頼論文）

●その他の執筆活動

「『オンライン版 宮澤喜一関係文書』解題」伊藤隆監修『オンライン版 宮澤喜一関係文書』丸善雄松堂　2021年12月

「コロナと国際関係」「国際日本研究」コンソーシアム編［荒木浩、白石恵理、松木裕美、ゴウランガ・チャラン・プラダン］『After/With コロナの「国際日本研究」――ヨーロッパからの報告』国際日本文化研究センター　2022年3月

倉本　一宏

●著書

『現代語訳　小右記12　法成寺の興隆』（編）吉川弘文館　2021年4月　310頁

『新説　戦乱の日本史』（亀田俊和、川戸貴史、千田嘉博、長南政義、手嶋泰伸と共著）SBクリエイティブ　2021年8月　240頁

『王朝貴族の実像1　王朝再読』（編・監修）臨川書店　2021年8月　424頁

『王朝貴族の実像2　京職と支配』（監修、市川理恵著）臨川書店　2021年8月　260頁

『権記 ビギナーズ・クラシックス 日本の古典』（編、藤原行成著）KADOKAWA　2021年9月　336頁

『現代語訳　小右記13　道長女の不幸』（編）吉川弘文館　2021年10月　304頁

「日本古代の君主号をめぐって―特に摂関期について」伊東貴之編『東アジアの王権と秩序――思想・宗教・儀礼を中心として』汲古書院　2021年10月　303頁～318頁（依頼論文）

『平安京の下級官人』講談社　2022年1月　272頁

『王朝貴族の実像3　病悩と治療』（監修、瀬戸まゆみ著）臨川書店　2022年2月　240頁

●その他の執筆活動

「平安貴族列伝（29）～（38）」『JBpress』日本ビジネスプレス　2021年4月～11月

「古代史の核心×革新5～12」『京都新聞』他各地方新聞　2021年4月20日～11月20日

「共同研究「貴族とは何か、武士とは何か」について」『NICHIBUNKEN NEWSLETTER』国際日本文化研究センター　2021年6月

書評「五味文彦著『武士論　古代中世史から見直す』（講談社）」『日本経済新

『運動としての大衆文化　協働・ファン・文化工作』（編）水声社　2021年9月　480頁
『戦争と日本アニメ　『桃太郎 海の神兵』とは何だったのか』（佐野明子・堀ひかり編著、他と共著）青弓社　2022年1月　181頁
『戦時下の大衆文化―統制・拡張・東アジア―』（劉建輝・石川肇編、他と共著）KADOKAWA　2022年2月　384頁
『メキシコ漫画イストリエタ＝Mexican Historieta　民俗文化としての漫画表現』（アルバロ・エルナンデス編、他と共著）思文閣　2022年3月　400頁
『大東亜共栄圏のクールジャパン　「協働」する文化工作』集英社　2022年3月　318頁

●論文

「蘭学としての「漫画」　近現代略画・まんが入門書におけるライラッセ『大絵画本』の系譜」『ユリイカ』青土社　2021年4月　157頁～170頁
インタビュー「一九八〇年代とサブカルチャー」宇野田尚哉・坪井秀人編著『対抗文化史　冷戦期日本の表現と運動』大阪大学出版会　2021年10月　323頁～360頁

●その他の執筆活動

「まんがでわかるまんがの描き方」（砂威、浅野龍哉と共著）『ヤングエース』KADOKAWA　2021年4月～2022年3月
書評「柄谷行人『ニュー・アソシエーショニスト宣言』」『週刊ポスト』2021年4月9日号　2021年3月
書評「パク・ソルメ著／斎藤真理子訳『もう死んでいる十二人の女たちと』」『週刊ポスト』2021年5月21日号　2021年5月
書評「ヘンリー・ジェンキンス著／渡部宏樹他訳『コンヴァージェンス・カルチャー　ファンとメディアがつくる参加型文化』」『週刊ポスト』2021年6月25日号　2021年6月
書評「竹倉史人『土偶を読む　130年間解かれなかった縄文神話の謎』」『週刊ポスト』2021年9月3日号　2021年8月
書評「葉真中顕『灼熱』」『週刊ポスト』2021年11月5日号　2021年10月
書評「西谷格『ルポ　デジタルチャイナ体験記』」『週刊ポスト』2022年1月7日号　2021年12月
書評「大童澄瞳『映像研には手を出すな！』」『週刊ポスト』2022年1月21日号　2022年1月
書評「キム・チョヨプ他著／斎藤真理子他訳『最後のライオニ　韓国パンデミックSF小説集』」『週刊ポスト』2022年3月25日号　2022年3月

「埴原先生に、褌を問うた時」新学術領域研究ヤポネシアゲノム 季刊誌『Yaponesian』第3巻ふゆ号　新学術領域研究ヤポネシアゲノム領域事務局　2022年3月

「「パイオニア精神ただよう稀少雑誌コレクション」『社会文化史データベース性風俗稀少雑誌コレクション』」丸善雄松堂　2022年3月

牛村　圭

●著書

『ストックホルムの旭日――文明としてのオリンピックと明治日本』中央公論新社　2021年7月　374頁

●論文

「1年遅れのTOKYO2020を終えて」『日本戦略研究フォーラム季報』Vol.90　日本戦略研究フォーラム　2021年10月　114頁～120頁（依頼論文）

●その他の執筆活動

「目を見張る運動用具の進化」『京都新聞』　2021年9月10日

「100年前の競技会に迫る」『神戸新聞』　2021年11月7日

榎本　渉

●著書

『中世禅の知』（末木文美士監修、亀山隆彦・米田真理子と共編著）臨川書店　2021年7月　336頁

●論文

「日元間の僧侶の往来規模」櫻井智美、飯山知保、森田憲司、渡辺健哉編『元朝の歴史　モンゴル帝国期の東ユーラシア』勉誠出版　2021年6月　226頁～238頁（依頼論文）

「日中交流史の中の中世禅宗史」『中世禅の知』（著書欄参照）臨川書店　2021年7月　37頁～72頁（依頼論文）

「日本における宋元印章文化」日本歴史学会編『日本歴史』884　吉川弘文館　2022年1月　21頁～27頁（依頼論文）

●その他の執筆活動

「大宰府・博多に入った宋代仏教」『西日本文化』500　西日本文化協会　2021年10月

大塚　英志

●著書

『物語消費論「ビックリマン」の神話学』星海社　2021年7月　281頁

『シン・モノガタリ・ショウヒ・ロン　歴史・陰謀・労働・疎外』星海社　2021年8月　204頁

社　2021年6月
エッセイ「「和をもって尊しとする」民族の街並みとは思えない光景（再録）」『日本人の忘れもの 知恵会議』京都新聞出版センター　2021年6月
「女になった英雄たち」（連載15回）『婦人公論.jp』中央公論新社　2021年7月～2022年3月
インタビュー「紙面検証　コロナ禍 関西経済の針路探る」『読売新聞』 2021年7月18日
「「王朝時代の実像によせて」『王朝時代の実像』」臨川書店　2021年9月
「ブラジルのフェージョアーダ」『あまから手帖』2021年10月号　クリエテ関西　2021年9月
「地球と地域のあいだには」『公研』10月号　公益産業研究調査会　2021年10月
「ラトビアの日本語学校」「関西なまりの英語」一心寺編『ちょっといい話　第15集』東方出版　2021年10月
インタビュー「いい言葉、いい人生」『PHP』2021年11月号　PHP研究所　2021年10月
インタビュー「時代の栞 「エエカゲンが面白い」森毅」『朝日新聞』（夕刊）2021年11月17日
インタビュー「「美人会長」発言で考えたい」『週刊ポスト』11月26日号　2021年11月
「時評　土足の限界」『アステイオン』95号　サントリー文化財団　2021年11月
「日本人が引き継いだ封建的精神「一所懸命」」『中央公論』2021年12月号　2021年11月
インタビュー「オレたちが受けた昭和の性教育」『週刊ポスト』12月10日号　2021年11月
インタビュー「開運パワースポット　京都に眠る7つの謎」『プレジデント』2022.2.4号　プレジデント社　2022年1月
「「第25回司馬遼太郎賞選評　文化的な遺伝子が支配 あなどれない歴史」石川禎浩『中国共産党、その百年』（筑摩選書）」司馬遼太郎記念館会誌『遼』2022年冬季号（第82号）公益財団法人司馬遼太郎記念財団　2022年1月
インタビュー「京都VS滋賀」『毎日新聞』 2022年1月1日
書評「「理屈と価値観の変化たどる」勝又基『親孝行の日本史』（中公新書）」『日本経済新聞』 2022年1月15日
インタビュー「私が見た古代エジプト展」『産経新聞』（夕刊） 2022年1月19日
「弥生と大阪」『公研』3月号　公益産業研究調査会　2022年3月
解説「平山亜佐子『明治・大正・昭和 不良少女伝―莫連女と少女ギャング団』（筑摩書房）」筑摩書房　2022年3月

（Bouden House, New York）　2021年12月
書評「楊儒賓『1949　禮讃』（台北・聯經出版）」『日本研究』第64集　国際日本文化研究センター　2022年3月

井上　章一

●著書
『歴史のミカタ』（磯田道史と共著）祥伝社　2021年7月　296頁
『南蛮幻想　ユリシーズ伝説と安土城』（上・下）草思社　2021年8月　400頁・368頁
『イケズな東京　150年の良い遺産、ダメな遺産』（青木淳と共著）中央公論新社　2022年1月　224頁

●論文
「美貌の歴史と美術の歴史」荒木浩、前川志織、木場貴俊編『〈キャラクター〉の大衆文化　伝承・芸能・世界』KADOKAWA　2021年11月　89頁～110頁（依頼論文）
「いわゆる「帝冠様式」と中国現代建築史―旧満州、新京の官衙を手がかりに」劉建輝、石川肇編『戦時下の大衆文化―統制・拡張・東アジア―』KADOKAWA　2022年2月　215頁～238頁（依頼論文）

●その他の執筆活動
書評「藤田勝也『平安貴族の住まい―寝殿造から読み直す日本住宅史』（吉川弘文館）」『京都民報』　2021年4月25日
書評「この人に訊け！」（連載8回）『週刊ポスト』　2021年3月～2022年3月
「京都の端から、こんにちは」（連載12回）『NICHIBUNKEN NEWSLETTER』国際日本文化研究センター　2021年4月～2022年3月
書評「「火葬を拒む心性のありよう」高橋繁行『土葬の村』（講談社現代新書）」『日本経済新聞』　2021年4月3日
「海の向こうで日本は。」（連載21回）『産経新聞』（夕刊）　2021年4月5日～2022年3月16日
エッセイ「ノーパン喫茶と大宅文庫」『大宅壮一文庫解体新書』勉誠出版　2021年5月
「それでも企業人は「城」を捨てられない」『中央公論』2021年6月号　2021年5月
書評「「音楽史から見る「権力」と「社会」」猪木武徳『社会思想としてのクラシック音楽』（新潮選書）」『波』2021年6月号　新潮社　2021年5月
インタビュー「耕論　いまどきの性教育」『朝日新聞』　2021年5月8日
インタビュー「性教育、親の「逃げ」にもきっと意味が」『朝日新聞デジタル』2021年5月11日
インタビュー「“よそさん”が京都で暮らすには？」『TRANSIT』52号　講談

書評「大下英治『ショーケン　天才と狂気』（青志社、二〇二一年五月、四六四頁）」『日文研』66号　国際日本文化研究センター　2021年9月

伊東　貴之

●著書

『「明治日本と革命中国」の思想史――近代東アジアにおける知とナショナリズムの相互環流』（楊際開と共編著）ミネルヴァ書房　2021年7月　464頁

『東アジアの王権と秩序――思想・宗教・儀礼を中心として』（編著）汲古書院　2021年10月　948頁

『東アジアにおける哲学の生成と発展――間文化の視点から』（廖欽彬、山村奨、河合一樹と共編著）法政大学出版局　2022年2月　886頁

●論文

「伝統中国の国家・社会論のための一考察――「伝統中国をどう捉えるか？」補遺―」『東アジアの王権と秩序――思想・宗教・儀礼を中心として』（著書欄参照）603頁～618頁（依頼論文）

「「禮教」の滲透・汎化とその展開――中國を中心とする近世東アジアの事例から―」京都大学中国哲学史研究会、王孫涵之編『中国思想史研究』43　京都大学中国哲学史研究会　2022年3月　103頁～145頁（依頼論文・査読付き）

●その他の執筆活動

書評「「青／蒼／碧／翠」の誘惑と躍動――ある「青年」漢詩人の誕生：谷口匡『西遊詩巻――頼山陽の九州漫遊』」『週刊 読書人』3386号　2021年4月

「あとがき」『「明治日本と革命中国」の思想史――近代東アジアにおける知とナショナリズムの相互環流』（著書欄参照）

「序言――日文研の共同研究会と本論集の趣旨」『東アジアの王権と秩序――思想・宗教・儀礼を中心として』（著書欄参照）

「跋文――共同研究会の経緯を踏まえて」『東アジアの王権と秩序――思想・宗教・儀礼を中心として』（著書欄参照）

「あとがき――東アジアにおける哲学の命運」『東アジアにおける哲学の生成と発展――間文化の視点から』（著書欄参照）

書評「羽根次郎著『物的中国論――歴史と物質から見る「大国」』（青土社）」一般社団法人・中国研究所『中国研究月報』Vol. 75／No. 11（No. 885）　一般社団法人・中国研究所　2021年11月

エッセイ「「常態化する（理念なき）米中対立の中で――多様化する経済連携枠組、中国語圏文学の翻訳は活況」【2021年：中国文学・文化年末回顧】」『図書新聞』3524号　武久出版　2021年12月

書評「評呂玉新《政体・文明・族群之辨―徳川日本思想史》」（中国語）榮偉（David Rong）『当代中国評論 CONTEMPORARY CHINA REVIEW（QUARTERY）』2021冬季刊（2021 Winter Issue）（総第七期）博登書屋

「天下のぞむ構え」『京都新聞』 2021年10月1日
書評「吉村智博著『大阪マージナルガイド』」『毎日新聞』 2021年10月9日
「山田方谷の精神に学ぶ」『毎日新聞』 2021年10月14日
対談「第73回正倉院展協賛記念　特別対談（小河義美と）」『読売新聞』 2022年10月30日
対談「歴史に学ぶパンデミック（水谷哲也と）」『現代化学』608号　2021年11月
「ゆえに「準備」を常に怠らず」『聖教新聞』 2021年11月7日
「新春対談 歴史が教えるコロナ後の社会」（伊藤公平と共著）『三田評論』1262号　慶應大学出版会　2022年1月
「うなぎの始末」『うなぎ百撰』153巻　うなぎ百撰会　2022年1月
「（耕論）時代劇どこへゆく」『朝日新聞』 2022年1月18日
書評「田代和生編著『近代日朝交流資料草書Ⅱ　方長老上京日史・飲冰行記』」『毎日新聞』 2022年1月19日
「第25回 菜の花忌シンポジウム 胡蝶の夢」（澤田瞳子、村上もとか、澤芳樹、古屋和雄と共著）『週刊朝日』127巻12号　2022年3月
「明治新政府の真実」『歴史街道』407号　PHP研究所　2022年3月
「「自然災害伝承碑」からのメッセージ」『信濃毎日新聞』 2022年3月11日
書評「赤瀬浩著『長崎丸山遊廓　江戸時代のワンダーランド』」『毎日新聞』 2022年3月12日
「「道路から考える新時代の防災・減災」フォーラム」『読売新聞』 2022年3月15日

磯前　順一

●著書

『差別の構造と国民国家―宗教と公共性』（シリーズ宗教と差別1）（吉村智博、浅居明彦と監修、上村静・苅田真司・川村覚文・関口寛・寺戸淳子・山本昭宏編）法蔵館　2021年11月　340頁
『탈국민국가라는 외재적 식민지주의［脱国民国家という外在的植民地主義］』（이소마에 준이치 / 히라노 가쓰야 / 전성곤 공저［平野克弥、全成坤と共著］）소명출판［ソミョン出版社］ 2021年12月　330頁

●論文

“Secularism and Untranslatability: Reading Talal Asad’s Secular Translations”（co-authored with Pradhan, G.C.）Mark Williams ed., *Religious Studies Review*, 47(2), Rice University, June 2021, pp. 165–175.（査読付き）

●その他の執筆活動

エッセイ「人文学の死－震災と学問」島薗進、末木文美士、大谷栄一、西村明編『近代日本宗教史6』春秋社　2021年7月

●その他の執筆活動

「心のふるさと 心の貯金」『幼児教育じほう』49巻1号　全国国公立幼稚園・こども園長会事務局「時報部」 2021年4月

「私のいえ、まち、くらし。」『at home』473号　アットホーム株式会社　2021年4月

「「脳内リゾート」でコロナ禍を生き抜く」『Healthy Life』142号　総合健診センターヘルチェック　2021年4月

書評「浦島充佳著『新型コロナ　データで迫るその姿』」『毎日新聞』 2021年4月10日

「マニアックさ　日本の武器」『日本経済新聞』 2021年4月10日

「「世襲好き」の心性見つめたい」『毎日新聞』 2021年4月16日

「磯田道史の古今をちこち」（連載12回）『読売新聞』 2021年4月21日～2022年3月9日

「本草学のマニアックな交流をふたたび」『NICHIBUNKEN NEWSLETTER』国際日本文化研究センター　2021年5月

書評「フレデリック・クレインス著『ウィリアム・アダムス　家康に愛された男・三浦按針』」『毎日新聞』 2021年5月22日

「緊急鼎談 危機を好機に変える処方箋」（古川元久、水野和夫と共著）『週刊朝日』126号　2021年6月

「それは、日本史にとって極めて重要な時であった」『歴史街道』398号　PHP研究所　2021年6月

「歴史は目的ではなく手段である。」『Galac』624号　KADOKAWA　2021年6月

「私の20代」『ひととき』21巻7号　ウエッジ　2021年6月

「観世大夫の家計簿」『能』757号　京都観世会館会報誌　2021年6月

「池上彰のこれ聞いていいですか？」（池上彰と共著）『毎日新聞』 2021年6月13日

「スペイン風邪に学ぶ コロナ終息までの歴史シミュレーション」『潮』720号　潮出版社　2021年7月

書評「仮名垣魯文原著『安政コロリ流行記』」『毎日新聞』 2021年7月10日

「内閣文庫に眠る徳川幕府の忍びたち。」『東京人』99巻　都市出版　2021年8月

書評「山口謠司著『明治の説得王・末松謙澄』」『毎日新聞』 2021年8月28日

「歴史からひもとく会計の役割」（連載6回）（坂本孝司と共著）『読売新聞』2021年9月15日～9月24日

「歴史家がみた日本農業の九変化」『月刊JA』67巻7号　全国農業組合中央会　2021年10月

「近代国家への道 旧幕臣たちが果たした役割とは」『歴史街道』402号　PHP研究所　2021年10月

●その他の執筆活動

「文遊回廊　第31回　菅原孝標女『更級日記』」『京都新聞』 2021年4月8日

会議報告等「京と江戸、美の視点で比較　第2回　日文研―京都アカデミックブリッジ（タイモン・スクリーチ、松平莉奈、石上阿希、内田孝と）」『京都新聞』 2021年4月27日

「文遊回廊　第32回　ひとりごと　心敬」『京都新聞』 2021年7月8日

「おのれを知る「日本人の忘れもの 知恵会議」」『京都新聞』 2021年7月31日

「源信という多層性と源隆国」『鴨東通信』No.113　思文閣出版　2021年9月

「序文」『After/With コロナの「国際日本研究」――ヨーロッパからの報告』（著書欄参照）

「はじめに」「国際日本研究」コンソーシアム編『「国際日本研究」コンソーシアム 2017→2021』国際日本文化研究センター　2022年3月

石上　阿希

●著書

『西川祐信『正徳ひな形』―影印・注釈・研究―』（加茂瑞穂と共編）臨川書店　2022年2月　464頁

●論文

「「書籍目録」にみる枕絵と好色本 」藤本幸夫編『書物・印刷・本屋―日中韓をめぐる本の文化史』勉誠出版　2021年6月　111頁～135頁（依頼論文）

「擬人化される身体部位」『美術フォーラム21』44号　2021年12月　44頁～48頁（依頼論文）

●その他の執筆活動

会議報告等「京と江戸、美の視点で比較　第2回　日文研―京都アカデミックブリッジ（荒木浩、タイモン・スクリーチ、松平莉奈、内田孝と）」『京都新聞』 2021年4月27日

「近世期の小袖雛形本『正徳ひな形』を読み解く：西川祐信雛形本研究会」『千總文化研究所年報』2号　2021年5月

「小袖をめぐる絵とことば―「文化・情報の結節点としての図像」」『NICHIBUN-KEN NEWSLETTER』国際日本文化研究センター　2021年9月

コラム「窓辺」（連載13回）『静岡新聞』（夕刊） 2021年10月4日～12月26日

「図録解題『訓蒙図彙』」安井眞奈美、ローレンス・マルソー、伊藤謙編著『「身体イメージの創造　感染症事態に考える伝承・医療・アート」図録』国際日本文化研究センター　2022年2月

磯田　道史

●著書

『歴史のミカタ』（井上章一と共著）祥伝社　2021年7月　296頁

所員活動一覧（2021年4月1日～2022年3月31日）

荒木　浩

●著書

『〈キャラクター〉の大衆文化 伝承・芸能・世界』（前川志織、木場貴俊と共編）KADOKAWA　2021年11月　376頁

『『今昔物語集』の成立と対外観（思文閣人文叢書）』思文閣出版　2021年12月　460頁

『古典の中の地球儀―海外から見た日本文学（人文知の復興4）』NTT出版　2022年3月　280頁

『After/With コロナの「国際日本研究」――ヨーロッパからの報告』（「国際日本研究」コンソーシアム編［荒木浩、白石恵理、松木裕美、ゴウランガ・チャラン・プラダン］）国際日本文化研究センター　2022年3月　267頁（複数言語）

●論文

“Reviewing Japanese Dream Culture and Its History: Where Ancient, Medieval and Modern Times”, University of Latvia ed., Oriental Studies 819, University of Latvia, April 2021, pp. 12–29.（依頼論文・査読付き）

「『徒然草』の時間―序説―」仏教文学会編『仏教文学』第46号　仏教文学会　2021年6月　91頁～105頁（依頼論文・査読付き）

「釈迦の出家と羅睺羅誕生――不干斎ハビアンと南伝仏教をめぐって――」日本文学協会編『日本文学』2021年6月号　日本文学協会　2021年6月　2頁～12頁（依頼論文・査読付き）

「明石における龍宮イメージの形成―テクスト遺産としての『源氏物語』と『平家物語』をつなぐ夢」エドアルド・ジェルリーニ、河野貴美子編『古典は遺産か？日本文学におけるテクスト遺産の利用と再創造（アジア遊学261）』勉誠出版　2021年10月　174頁～189頁（依頼論文・査読付き）

「序〈キャラクター〉と〈世界〉の大衆文化史」『〈キャラクター〉の大衆文化 伝承・芸能・世界』（著書欄参照）7頁～27頁

「第4巻序論〈キャラクター〉と〈世界〉の大衆文化史」国際日本文化研究センター・プロジェクト推進室編『日文研大衆文化研究叢書 全5巻序論集』国際日本文化研究センター　2021年11月　31頁～38頁

「〈おほけなき心〉と『源氏物語』の構造」寺田澄江、陣野英則、木村朗子編『身と心の位相―源氏物語を起点として』青簡舎　2021年12月　244頁～266頁（依頼論文・査読付き）

「The Popular Culture History of “Characters” and “Worlds”」国際日本文化研究センター・プロジェクト推進室編『日文研大衆文化研究叢書 全5巻序論集』国際日本文化研究センター　2022年3月　78頁～85頁

第368回　令和3年　7月 8日（木）
第369回　令和3年　7月29日（木）
第370回　令和3年　9月 2日（木）
第371回　令和3年　9月16日（木）
第372回　令和3年　10月 7日（木）
第373回　令和3年　10月21日（木）
第374回　令和3年　11月11日（木）
第375回　令和3年　11月25日（木）
第376回　令和3年　12月 9日（木）
第377回　令和3年　12月23日（木）
第378回　令和4年　1月 6日（木）
第379回　令和4年　1月20日（木）
第380回　令和4年　2月 3日（木）
第381回　令和4年　2月17日（木）
第382回　令和4年　3月 3日（木）
第383回　令和4年　3月17日（木）

外国人来訪者

（※新型コロナウイルス感染症拡大の影響により0件）

海外渡航

坪井 秀人　教授
目　的　アルザス欧州日本学研究所にて研究者・スタッフと国際新世代ワークショップの会場設営・会議進行及び次年度以降の打合せ、“Japanese Studies and Transnationalism”の運営及び会議司会進行
目的国　フランス
期　間　令和3年10月26日～11月3日

会議

運営会議

第 60 回　令和 3 年　6 月 18 日（金）
第 61 回　令和 3 年　7 月 30 日（金）（臨時開催）
第 62 回　令和 3 年　8 月 26 日（木）（臨時開催）
第 63 回　令和 3 年　12 月 10 日（金）
第 64 回　令和 4 年　3 月　4 日（金）

調整会議

第 362 回　令和 3 年　4 月　7 日（水）
第 363 回　令和 3 年　4 月 21 日（水）
第 364 回　令和 3 年　5 月 12 日（水）
第 365 回　令和 3 年　5 月 26 日（水）（書面審議）
第 366 回　令和 3 年　6 月　2 日（水）
第 367 回　令和 3 年　6 月 15 日（火）
第 368 回　令和 3 年　7 月　7 日（水）
第 369 回　令和 3 年　7 月 28 日（水）
第 370 回　令和 3 年　9 月　1 日（水）
第 371 回　令和 3 年　9 月 15 日（水）
第 372 回　令和 3 年　10 月　6 日（水）
第 373 回　令和 3 年　10 月 20 日（水）
第 374 回　令和 3 年　11 月 10 日（水）
第 375 回　令和 3 年　11 月 24 日（水）
第 376 回　令和 3 年　12 月　8 日（水）
第 377 回　令和 3 年　12 月 22 日（水）
第 378 回　令和 4 年　1 月　5 日（水）
第 379 回　令和 4 年　1 月 19 日（水）
第 380 回　令和 4 年　2 月　2 日（水）
第 381 回　令和 4 年　2 月 16 日（水）
第 382 回　令和 4 年　3 月　2 日（水）
第 383 回　令和 4 年　3 月 15 日（火）

センター会議

第 362 回　令和 3 年　4 月　8 日（木）
第 363 回　令和 3 年　4 月 22 日（木）
第 364 回　令和 3 年　5 月 13 日（木）
第 365 回　令和 3 年　5 月 27 日（木）（開催中止）
第 366 回　令和 3 年　6 月　3 日（木）
第 367 回　令和 3 年　6 月 17 日（木）

国際研究集会

第55回［令和4年2月11日（金）～12日（土）］
テーマ　戦後日本の傷跡
研究代表者　坪井 秀人 教授／宇野田 尚哉（大阪大学大学院 教授）

公開講演会

［令和3年10月26日（火）］
第3回　日文研―京都アカデミック ブリッジ
テーマ　京で語る医と文化　宗田一（そうだ はじめ）　生誕100年
開会挨拶　井上 章一 所長
パネリスト　松田 清（神田外語大学 客員教授／京都大学 名誉教授）／伊藤 謙（大阪大学総合学術博物館 講師、薬学博士、薬剤師、学芸員）／フレデリック・クレインス 教授／光平 有希 特任助教
進　行　安井 眞奈美 教授
［令和4年3月9日（水）］
第4回　日文研―京都アカデミック ブリッジ
テーマ　京都の学を語ろう～京都大学創立125年～
パネリスト　稲葉 穣（京都大学人文科学研究所 所長）／吉田 憲司（国立民族学博物館 館長）／井上 章一 所長
進　行　光平 有希 特任助教
［令和4年3月11日（金）］
第1回　日文研×読売Bizフォーラム東京　（オンライン開催）
テーマ　建築の政治学～権力の館としての建築を考える
対　談　御厨 貴（東京大学／東京都立大学 名誉教授）／井上 章一 所長

Nichibunken Evening Seminar

第246回［令和3年6月3日（木）］（オンライン同時開催）

発表者　ジャミラ・ロドリゲス（日文研 外来研究員）

テーマ　Remaking the lived body: surveying the voices of the pandemic in everyday life

第247回［令和3年11月4日（木）］（オンライン同時開催）

発表者　スティーヴェン・ジョン・ロディ（サンフランシスコ大学 教授／日文研 外国人研究員）

テーマ　Petals on a Wet, Black Bough: The Waterways of Chikushiji and Senryū

学術講演会

第69回［令和4年1月7日（金）］

講演者　稲賀 繁美（日文研 名誉教授／京都精華大学 教授）

テーマ　稽古論

開会挨拶　井上 章一 所長

司　会　松田 利彦 教授

第70回［令和4年1月28日（金）］（オンライン開催）

講演者　ジョン・ブリーン（日文研 名誉教授）

テーマ　変遷する聖地―伊勢

開会挨拶　井上 章一 所長

司　会　荒木 浩 教授

日文研一般公開

［令和3年11月20日（土）］（オンライン開催）

テーマ　スポーツと文明：近代東アジアにおける展開を中心に

【YouTube プレミア公開】

鼎　談「帝国・身体・記録」

ゲスト　荒川 章二（国立歴史民俗博物館 名誉教授）

ゲスト　佐々木 浩雄（龍谷大学 准教授）

劉 建輝（日文研 教授）

【YouTube 公開】

共同研究会「文明としてのスポーツ／文化としてのスポーツ」

研究代表者　牛村 圭（日文研 教授）

【特設ページコンテンツ】

所蔵資料のウェブ展示「写真・絵葉書からみる戦前のスポーツ」

日文研フォーラム

第340回［令和3年9月14日（火）］（開催延期）

発表者　青木 信夫（天津大学建築学院 教授／日文研 外国人研究員）

テーマ　中国における文化遺産保護活動の15年

コメンテーター　劉 建輝 教授

第341回［令和3年10月12日（火）］

発表者　堀内 アニック（パリ大学 教授／日文研 外国人研究員）

テーマ　『日本山海名産図会』（1799）を通して見る近世後期大坂の物産文化

コメンテーター　フレデリック・クレインス 教授

第342回［令和3年11月9日（火）］

発表者　髙井 由香理（ヨーク大学（カナダ）リサーチ・アソシエイト／日文研 外国人研究員）

テーマ　良妻賢母の規範を越えて――明治期ハワイにおける日本人移民の結婚と離婚を中心に

コメンテーター　安井 眞奈美 教授

第343回［令和3年12月14日（火）］

発表者　青木 信夫（天津大学建築学院 教授／日文研 外国人研究員）

テーマ　中国における文化遺産保護活動の15年

コメンテーター　劉 建輝 教授

日文研木曜セミナー

第268回［令和3年10月21日（木）］（オンライン開催）

発表者　ゴウランガ・チャラン・プラダン機関研究員

テーマ　世界文学としての『方丈記』―20世紀初頭までの欧米における鴨長明像

コメンテーター　平野 克弥（カリフォルニア大学ロサンゼルス校 准教授／京都大学人文科学研究所 招聘教授）

第269回［令和3年12月16日（木）］（オンライン開催）

発表者　佐野 明子（同志社大学 准教授／日文研 客員准教授）

テーマ　戦争と日本アニメーション：『桃太郎　海の神兵』（瀬尾光世監督、1945年）とは何だったのか？

コメンテーター　堀 ひかり（東洋大学 准教授）

第270回［令和4年3月17日（木）］（オンライン開催）

発表者　磯前 順一 教授

テーマ　居場所はできたかい？――震災と社会差別、東日本大震災11年

コメンテーター　安井 眞奈美 教授

外国人研究員　呂 順長（浙江工商大学教授）
⦿令和3年9月30日　退職
助教　呉座 勇一
⦿令和3年10月1日　採用
准教授　エドワード・ボイル
機関研究員　呉座 勇一
⦿令和3年10月31日　退職
外国人研究員　張 龍妹（北京外国語大学教授）
⦿令和3年11月30日　退職
特任助教　前川 志織
⦿令和3年12月31日　退職
外国人研究員　堀内 アニック（パリ第7大学教授）
⦿令和4年3月28日　採用
外国人研究員　李 秉鎮（世宗大學校教授）
⦿令和4年3月31日　退職
教授　坪井 秀人
外国人研究員　青木 信夫（天津大学教授）
外国人研究員　髙井 由香理（ヨーク大学リサーチ・アソシエイト）
外国人研究員　周 実（中国東北大学教授）
外国人研究員　スティーヴェン・ジョン・ロディ（サンフランシスコ大学教授）
機関研究員　藤本 憲正
機関研究員　ゴウランガ・チャラン・プラダン
プロジェクト研究員　アルバロ・ダビド・エルナンデス・エルナンデス
プロジェクト研究員　石川 肇
プロジェクト研究員　稲垣 智恵
プロジェクト研究員　根川 幸男
技術補佐員　岸本 督司
技術補佐員　南郷 晃子
⦿令和4年3月31日　委嘱期間満了
客員教授　芝崎 厚士（駒澤大学教授）
客員教授　稲賀 繁美（京都精華大学教授）
客員准教授　二村 淳子（白百合女子大学）
客員准教授　伊藤 謙（大阪大学総合学術博物館特任講師）

彙　　報

（令和３年４月１日～令和４年３月31日）

人事異動

◉令和３年４月１日　採用

外国人研究員　青木 信夫（天津大学教授）

外国人研究員　髙井 由香理（ヨーク大学リサーチ・アソシエイト）

機関研究員　上野 勝之

プロジェクト研究員　石川 肇

技術補佐員　南郷 晃子

◉令和３年４月１日　昇任

教授　磯田 道史

◉令和３年４月１日　委嘱

客員教授　川島 浩平（早稲田大学スポーツ科学学術院教授）

客員教授　金 泰虎（甲南大学国際言語文化センター教授）

客員教授　芝崎 厚士（駒澤大学教授）

客員教授　稲賀 繁美（京都精華大学教授）

客員准教授　東海林 亜矢子（慶應義塾大学・日本女子大学非常勤講師）

客員准教授　伊藤 謙（大阪大学総合学術博物館特任講師）

◉令和３年５月１日　採用

プロジェクト研究員　村島 健司

◉令和３年５月１日　委嘱

客員教授　等松 春夫（防衛大学校教授）

◉令和３年６月１日　採用

技術補佐員　岸本 督司

◉令和３年７月１日　採用

外国人研究員　周 実（中国東北大学教授）

外国人研究員　スティーヴェン・ジョン・ロディ（サンフランシスコ大学教授）

◉令和３年７月31日　退職

外国人研究員　王 志松（北京師範大学教授）

◉令和３年８月１日　採用

助教　平松 誠

◉令和３年８月31日　退職

外国人研究員　財吉拉胡（内蒙古民族大学教授）

◉令和３年９月１日　採用

教授　タイモン・スクリーチ

◉令和３年９月２日　採用

中国古典学の基礎（継続）

代表者　伊東 貴之

概　要　経書を中心とするオーソドックスな中国古典語の文献を中国音と訓読とを併用して読解する技法を涵養する。併せて中国古典学や儒教入門のための道案内とする。

近代宗教思想史基礎論（継続）

代表者　磯前 順一

概　要　井上哲次郎をめぐる基礎資料を講読するとともにその背景をなす理論的な文献の読書を縦横無尽に行う。（備考：前年度までの「宗教学基礎論」からの継続）

日本政治外交史文献・史料講読（新規）

代表者　楠 綾子

概　要　日本政治外交史に関する最新の研究動向を探り、外交史研究のありかたを考えるために、内外の最先端の研究や歴史史料を読む。

◆基礎領域研究

英文日本歴史研究書講読（継続）

代表者　牛村 圭

概　要　達意の英語で書かれた日本史研究書を素材に、英文を正しく読み、自然な日本語にする手法の修得を目指す。

中世文学講読（継続）

代表者　荒木 浩

概　要　日本中世文学の文献を、影印を参照し、英訳などとも対比しながら精読するとともに、最新の研究動向などについての発表や情報交換の場としても活用する。

韓国語の運用（基礎・応用）（継続）

代表者　松田 利彦

概　要　業務や研究で韓国語を必要とする職員・大学院生等を対象に韓国語の会話・作文・読解の習得を目指した授業を行う。基本的に昨年度からの受講生を対象としているが、ある程度学習歴のある方の新規受講も歓迎する（要相談）。

古記録学基礎研究（継続）

代表者　倉本 一宏

概　要　日本前近代の根幹的史料である古記録の解読を、原本や写本の見方・扱い方も含めて考えていく。当面、源経頼の『左経記』を読む。

フランス語の運用（基礎）（新規）

代表者　松木 裕美

概　要　初心者を対象として、初歩の運用能力を実践的に身に付ける。

フランス語の運用（応用）（新規）

代表者　松木 裕美

概　要　フランス語の文献の読解と、フランス語での口頭発表や論文作成能力向上を目的とした練習を行う。

文学・文化史理論入門（継続）

代表者　坪井 秀人

概　要　文学および文化史に関する基礎的な理論を学びながらテクストの読解・分析の実践的方法を修得する。

近現代史史料文献研究（継続）

代表者　瀧井 一博

概　要　日本近現代史の基礎史料と古典的および先端的な文献を講読し、社会科学的な歴史研究の方法と実践を討究する。

長谷川 義則、佐野 春仁、松田 祥宏、中村 彰宏、小林 祥一、五十里 翔吾、武澤 里映、三谷 和男、西原 啓史、波瀬山 祥子、静 貴生、門脇 貴教

〔海外共同研究員名〕

ブルネット・ブルネッティ、林 維真、陳 東和

〈第1回研究会〉

2021年7月3日（オンライン開催）

分科会ごとの説明

2021年7月4日（オンライン開催）

研究方針などの打ちあわせ

〈第2回研究会〉

2021年11月27日（オンライン同時開催）

次世代デジタル技術の本草学への応用についての座談会

座談形式でのディスカッション

2021年11月28日（オンライン同時開催）

研究方針などの打ちあわせ

〈第3回研究会〉

2022年2月19日（オンライン開催）

第1部

伊藤 謙「趣旨説明およびご挨拶」

基調講演1：近藤 誠一（ゲストスピーカー）「世界遺産・石見銀山15周年を祝して」

基調講演2：磯田 道史「石見銀山で語る近世の経済社会とマスク」

司会：福本 理恵

第2部

仲野 義文「講演」

石橋 隆「講演」

門脇 貴教「講演」

福本 理恵「講演」

パネルディスカッション

コーディネーター：伊藤 謙

〈第4回研究会〉

2022年2月26日（オンライン開催）

本研究会における成果報告

2022年2月27日（オンライン開催）

本研究会における成果報告

（文責：研究協力課）

トルコ戦争の影響に注目して〜」
蝶野 立彦「16〜17世紀のヨーロッパにおける《日本観の形成》と《教派対立》との関わりについての考察――ドイツ語圏を中心に」
小俣ラポー 日登美「18世紀―鑑としての日本」
クレインス 桂子「オランダ東インド会社関係者を通じてオランダに伝わった日本情報」
小川 仁「17世紀イタリアにおける日本観の変遷」
フレデリック・クレインス「17世紀後半から18世紀前半のプロテスタント世界における日本観の形成」
宋 琦「西洋人の見た日本宗教」
タイモン・スクリーチ「新発見「奥羽・出羽キリシタン奉答書」の別本」
滝川 祐子「西欧における日本の知の広がり：二名法による分類、博物学のグローバリゼーション（18世紀〜）」
2022年2月27日（オンライン開催）
滝澤 修身「イエズス会宣教師の日本人観」
伊川 健二「天正遣欧使節情報のいろいろ」
スヴェトラーナ・コルネーエヴァ「17〜19世紀の西欧やロシアで培われた日本の法と刑罰観」 (17)
光平 有希「19世紀西洋音楽が描く「日本」」
エリオット・アンドリュー「絵及び伝達手段としての観光葉書―インバウンド観光で見る西洋における日本観の形成（1870–1910）」
ゴウランガ・チャラン・プラダン「西洋における日本中世文学の受容」
瀧井 一博「ローレンツ・フォン・シュタインと明治中期のシュタイン詣で」

東アジアのMultidisciplinary Scienceとしての本草学の再構成―実物検証を伴う文理融合研究の新展開－
（研究代表者　伊藤 謙、磯田 道史）
〔共同研究者名〕
劉 建輝、安井 眞奈美、石川 肇、深尾 葉子、北島 宣、飯島 真里子、石橋 隆、多田 伊織、仲野 義文、龍村 周、清水 徳朗、藤浦 淳、細野 靖之、前山 和範、三本木 一夫、犬伏 壮一郎、中澤 慶久、長江 惣吉、小原 正顕、宮脇 修一、古田 悟郎、玉木 久登、福本 理恵、

川西 孝男「キリシタン大名蒲生氏郷と正室相応院「冬姫」に関する研究」
豊田 裕章（ゲストスピーカー）「後鳥羽院政の特色―院御所高陽院における禁中包摂の問題を中心に」
〈第8回研究会〉
2022年1月8日（オンライン同時開催）
野口 孝子「里内裏について」
関 幸彦「刀伊事件と王朝軍制―武士論を省察する」
髙橋 昌明「福原遷都は離宮造りではない」
奥川 一臣（ゲストスピーカー）「平安貴族の衣―構成や形状から」

西洋における日本観の形成と展開
（研究代表者　フレデリック・クレインス）
〔共同研究者名〕
榎本 渉、井上 章一、瀧井 一博、磯田 道史、光平 有希、ゴウランガ・チャラン・プラダン、小川 仁、二村 淳子、稲賀 繁美、タイモン・スクリーチ、ジョン・ブリーン、松田 清、滝澤 修身、郭 南燕、伊川 健二、スヴェトラーナ・コルネーエヴァ、清水 有子、大場 はるか、アンドリュー・エリオット、蝶野 立彦、滝川 祐子、クレインス 桂子、小俣ラポー 日登美
〔海外共同研究員名〕
イェルーン・ラーメルス、宋 琦
〈第1回研究会〉
2021年10月23日（オンライン同時開催）
フレデリック・クレインス「趣旨説明」
2021年10月24日（オンライン同時開催）
井上 章一「細川ガラシャとイエズス会の物語」
松田 清「日文研外書―思い出の書物と最新の収書―」
〈第2回研究会〉
2022年2月26日（オンライン開催）
松田 清「ドイツ・プロテスタントの日本観― Evangelische Allianz ベルリン支部と岩倉使節団との会談記事から」
井上 章一「日ユ同祖論とそのルーツ」
榎本 渉「日文研所蔵『諸師贈送手巻』から見た清代の日本観」
郭 南燕「16–17世紀イエズス会の日本観」
清水 有子「スペイン帝国の日本人観」
大場 はるか「近世の神聖ローマ帝国南部における日本人描写～対

青木 栄一（ゲストスピーカー）「自著『文部科学省』を語る―応用問題としての大学ファンド、こども庁を見据えて」

2021年12月5日（オンライン同時開催）

今後の研究会の計画について共同討議

〈第6回研究会〉

2022年3月5日（オンライン開催）

西田 彰一「水野錬太郎の教育思想―政治教育協会における取組みを中心に」

大澤 聡「日本型「教養」の政治的帰趨」

貴族とは何か、武士とは何か

（研究代表者　倉本 一宏）

〔共同研究者名〕

榎本 渉、呉座 勇一、伊東 貴之、磯田 道史、上野 勝之、龔 婷、久葉 智代、東海林 亜矢子、青山 幹哉、石田 俊、大石 学、岡野 友彦、川合 康、木下 聡、京楽 真帆子、関 幸彦、髙橋 昌明、田中 誠、佃美香、告井 幸男、寺内 浩、野口 孝子、野口 実、東島 誠、樋口 健太郎、カレル・フィアラ、服藤 早苗、堀井 佳代子、松田 敬之、松永 和浩、美川 圭、森 公章、刑部 芳則、川西 孝男、重田 香澄、下向井 龍彦

〔海外共同研究員名〕

宋 浣範、梁 暁弈、劉 暁峰

〈第5回研究会〉

2021年5月15日（オンライン開催）

松永 和浩「室町殿「公家化」の政治的意義」

森 公章「「武者」と「武士」―起家と新社会集団―」

磯田 道史「公家の震災復興と大名家―文政京都地震を中心に―」

〈第6回研究会〉

2021年7月10日（オンライン開催）

川合 康「治承・寿永の内乱と『平家物語』」

青山 幹哉「鎌倉四代藤原頼経の将軍就位」

松田 敬之「華士族制と「家」意識」

東海林 亜矢子「平安～鎌倉期の大饗儀礼について」

〈第7回研究会〉

2021年10月9日（オンライン同時開催）

告井 幸男「国衙軍制の一齣」

岡野 友彦「伊勢国司北畠氏は貴族か大名か」

基調講演Ⅱ
呉 叡人「Nation as a Wound: State-boundary redrawing and its consequences in Post-WWII Northeast Asia, with a focus on Taiwan」
新世代パネルⅡ
「傷としての身体の変容と表象」
橋川 智哉「戦中－戦後に見る海野十三の人体改変モチーフ」
小島 秋良「「戦地再訪」作品に見る「傷」――戦地空間と身体への異変」
アストギク・ホワニシャン「「あざらしっ子」：サリドマイド事件を振り返る」
ディスカッサント：尹 芷汐
ラウンドテーブル
ウィリアム・マロッティ、呉 叡人、高 榮蘭、佐藤 泉、森岡 卓司、尹 芷汐
司会：坪井 秀人

日本型教育の文明史的位相
（研究代表者　瀧井 一博）
(14)
〔共同研究者名〕
根川 幸男、齊藤 紅葉、稲垣 恭子、竹内 里欧、西田 彰一、齊藤 智、ジェルミー・ラプリー、安藤 幸、井上 義和、椎名 健人、高山 敬太、片山 杜秀、宇野 重規、柏木 敦、大澤 聡、大田 美佐子、阿川 尚之、足羽 與志子、礒山 麻衣、待鳥 聡史、瀬平劉 アントン、大中 有信、平松 隆円
〔海外共同研究員名〕
苅谷 剛彦
〈第4回研究会〉
2021年6月19日（オンライン開催）
瀧井 一博、稲垣 恭子、竹内 里欧「日文研共同研究会「「日本型」教育文化を問い直す―新たな人間形成論をめざして」を振り返って」
書評会「小松 光／ジェルミー・ラプリー『日本の教育はダメじゃない―国際比較データで問いなおす』（ちくま新書）の著者を囲んで」
〈第5回研究会〉
2021年12月4日（オンライン同時開催）
待鳥 聡史「体制内改革の理念としての近代主義と現実主義」

クテル・パーティー」と大島渚「絞死刑」のあいだから―」
増田 斎「痛みに共感するイエス像をめぐって―戦後キリスト教界と遠藤周作」
小杉 亮子「全共闘運動の傷跡―東大闘争参加者の「その後」から」
〈第7回研究会〉
2021年12月18日（オンライン同時開催）
個別発表
坪井 秀人「妻の崩壊―江藤淳と戦後男性保守批評」
川口 隆行「在韓被爆者支援と文学―深川宗俊と御庄博実」
パネル「戦後日本と台湾の傷跡」
中村 平「台湾先住民を日本人にさせる殖民暴力とその傷跡の分有：日本のおかげと恩という語りとの出会い」
坪田＝中西 美貴（ゲストスピーカー）「台湾の移行期正義における日本の不/在」
パネリストとディスカッサントによるディスカッション
ディスカッサント：李　文茹
〈第8回研究会〉
第55回国際研究集会
2022年2月11日（オンライン開催）
基調講演 I
ウィリアム・マロッティ「Hijikata Tatsumi and the fūten: radical engagements with history and belonging in 1968」
ディスカッサント：鳥羽 耕史
新世代パネル I
‘Listening’ and ‘Writing’ in Post-War Japan: The Kikigaki Movement, 1950–1980
キアラ・コマストリ「The Remaking of “Folktales” in 1950s Japan: Journal ‘Minwa’ and the Movement of Yamashiro Tomoe」
奥村 華子「The Japanese Repatriates doing ‘Kikigaki’: The Cultural Movement of Omura Ryo and Morisaki Kazue in the 1950s and 60s in Japan」
後藤田 和「The ‘Kikigaki’ of the Discriminated Buraku Communities: Focusing on Michiko Shibata’s activities in the 1970s」
髙畑 早希「The Development of ‘Minwa’ after the National Historical Movement: Focusing on the Approach to Children’s Culture」
ディスカッサント：森岡 卓司
2022年2月12日（オンライン開催）

〈第 12 回研究会〉
2022 年 3 月 12 日（オンライン開催）
佐野 真由子「縮小社会の万国博覧会？」

戦後日本の傷跡
（研究代表者　坪井 秀人、宇野田 尚哉）
〔共同研究者名〕
田村 美由紀、増田 斎、葉 暁瑶、橋川 智也、劉 影、石川 巧、辛島 理人、川口 隆行、黒川 伊織、小杉 亮子、飯田 祐子、高 榮蘭、佐藤 泉、美馬 達哉、鳥羽 耕史、宋 恵媛、光石 亜由美、ニコラス・ランブレクト、キツニック・ラウリ、解 放、中村 平、髙畑 早希、奥村 華子、市川 遥
〔海外共同研究員名〕
キアラ・コマストリ、アストギク・ホワニシャン
〈第 5 回研究会〉
2021 年 4 月 10 日（オンライン開催）
パネル「文学と記憶そして伝承」
田村 美由紀「語りかける声＝傷跡との接触―崎山多美の短編小説から考える」
髙畑 早希「戦争記憶を民話として継承するということ―松谷みよ子等、第二次民話運動の頃を中心に」
2021 年 4 月 11 日（オンライン開催）
パネル「移動者たちの戦後」
宋 恵媛「移動者たちの「在日朝鮮人文学」: 帰還、密航、大村収容所」
石川 巧「中国山西省残留日本人たちの戦後」
解 放「失われた植民地への眼差し」
ニコラス・ランブレクト「宮尾登美子の引揚げ小説―記憶を思い起こす苦しみ」
〈第 6 回研究会〉
2021 年 9 月 25 日（オンライン開催）
パネル「傷跡を語る森崎和江」
奥村 華子「傷を重ねる―森崎和江の聞き書きを軸に」
佐藤 泉「森崎和江『からゆきさん』―傷跡のインターセクショナリティ」
パネル「傷跡としての 1960 年代」
高 榮蘭「翻訳されるレイプと男性セクシュアリティ―大城立裕「カ

小口 雅史「日本古代に残された希有な私信群―現代に伝わるはずのない紙石山紙背文書をめぐって」

〈第9回研究会〉

2021年10月16日（オンライン開催）

金 泰虎「正倉院所蔵の統一新羅文書―その機能と伝来論を中心に―」

〈第10回研究会〉

2022年1月29日（オンライン開催）

梶谷 真司「言葉の中の身体―江戸時代の医学書・養生書における身体の多層性」

縮小社会の文化創造：個・ネットワーク・資本・制度の観点から

（研究代表者　山田 奨治）

〔共同研究者名〕

松田 利彦、田村 美由紀、太下 義之、佐野 真由子、谷川 建司、大石 真澄、小川 さやか、荻野 幸太郎、沢田 眉香子、服部 圭郎、服部 正、三脇 康生、山本 泰三、吉澤 弥生、吉村 和真、山下 典子、木村 智哉、伊藤 遊、玉野井 麻利子

〈第8回研究会〉

2021年5月15日（オンライン開催）

岡本 光博（ゲストスピーカー）「俗語イメージの占有」

津田 大介（ゲストスピーカー）「「あいトリ」後のソーシャルメディアと文化創造の行方」

〈第9回研究会〉

2021年7月10日（オンライン開催）

太下 義之「ミュージアムの終活（または再生）」

香坂 玲（ゲストスピーカー）「縮小する農山村の担い手と知識の伝承と産品・体験の差別化の課題」

〈第10回研究会〉

2021年9月11日（オンライン同時開催）

研究展示に向けた意見交換

〈第11回研究会〉

2021年11月13日（オンライン同時開催）

木村 智哉「映像産業史研究から見えてきたもの――現代的意義と理論的枠組みについての試論」

谷川 建司「縮小する出版業界――プロの批評家の批評空間縮小による雑誌メディアの質的変化」

て―」
藤巻 和宏「近世の「無常」概念は近代に継承されたのか」
エドアルド・ジェルリーニ「無形文化を支える無常観　テクスト遺産論から学んだこと」
〈第4回研究会〉
2022年1月29日（オンライン開催）
池上 保之「『徒然草』における絵画化の一視点―江戸初期を中心に―」
陸 晩霞「『徒然草』の無常観と美意識―内典外典の利用を視座に」
2022年1月30日（オンライン開催）
廖 欽彬（ゲストスピーカー）「根本的事実としての無常―唐木順三を通して」

日本のサブカルチャーと多様性　グローバルな多様化社会に貢献する国際日本学の研究方針とペダゴジー
（研究代表者　エドモン エルネスト・ディ・アルバン）
〔共同研究者名〕
大塚 英志、アルバロ・ダビド・エルナンデス・エルナンデス、石田 美紀、山本 忠宏、ジェームズ・ウェルカー、パトリック・ガルブレイス、須川 亜紀子、田中 東子、堀 あきこ、斉藤 巧弥、藤岡 美玲
〔研究発表〕
（※新型コロナウイルス感染症の影響により2023年度に延期して実施予定）

〈基幹共同研究〉
「かのように」という原理で形成してきた文通―「文書」概念や、その様式、記号、表象、意図性
（研究代表者　マルクス・リュッターマン）
〔共同研究者名〕
荒木 浩、榎本 渉、磯前 順一、金 泰虎、廣田 浩治、梶谷 真司、小島 道裕、森 洋久、小口 雅史、岡崎 敦、高橋 一樹、ウィッターン・キリスティアン
〔海外共同研究員名〕
ミハエル・キンスキー、イエルグ・クウェンサー
〈第8回研究会〉
2021年6月12日（オンライン開催）

の井上哲次郎論を読む―研究史の整理とその画期性」」
司会：苅田 真司
コメント：小倉 慈司、関口 寛
〈第3回研究会〉
2022年2月13日（オンライン開催）
磯前 礼子「萩野由之書簡の翻刻およびその考察　差出日付同定への模索」
小倉 慈司「7 大正元年（1912）10月31日付大森金五郎書簡についての検討」
コメント：上村 静、萩原 稔、小田 龍哉
全体討論
司会：苅田 真司

ソリッドな〈無常〉／フラジャイルな〈無常〉―古典の変相と未来観
（研究代表者　荒木 浩）
〔共同研究者名〕
呉座 勇一、ゴウランガ・チャラン・プラダン、榎本 渉、虞 雪健、石原 知明、上杉 幹、中川 真弓、アリレザー・レザーイー、土田 耕督、河野 貴美子、橋本 雄、藤巻 和宏、山中 玲子、小山 聡子、木下 華子、佐藤 弘夫、髙尾 祐太、辻 浩和、石井 公成、永井 久美子、児島 啓祐、田村 正彦、池上 保之、木場 貴俊
〔海外共同研究員名〕
エドアルド・ジェルリーニ、ヤーラ・エリオル・モリス、陸 晩霞、張 龍妹
〔研究発表〕
〈第1回研究会〉
2021年6月5日（オンライン開催）
荒木 浩「「ソリッドな〈無常〉／フラジャイルな〈無常〉―古典の変相と未来観」という共同研究について―具体的な論考を提示しつつ」
〈第2回研究会〉
2021年8月8日（オンライン開催）
張 龍妹「東アジアにおける宮廷女性と文学」
荒木 浩「無常と時間―『方丈記』と『徒然草』」
〈第3回研究会〉
2021年11月13日（オンライン開催）
田村 正彦「無常観と無常感―日本文学における無常観研究につい

イメージ群と岸田劉生《麗子像》」
藤貫 裕「意味の網の目としての「ラング」とその批判的考察――丸山圭三郎を手掛かりに」
〈第8回研究会〉
2021年9月4日（オンライン開催）
志賀 祐紀「柳田國男の昔話採集と蜘蛛の巣」
近藤 貴子「草間彌生の網」
〈第9回研究会〉
2021年10月2日（オンライン開催）
藤本 憲正「イースターリリーの貿易とキリスト教」
申 昌浩「Web上の無明で覗く、レス（-less）進化論」
片岡 真伊「蜘蛛の巣上の翻訳者たち―零れ落ちる身心知の未来―」
〈第10回研究会〉
2021年11月27日（オンライン同時開催）
尾鍋 智子「Webの思想―通常科学と疎外をめぐって―」
多田 伊織「蜘蛛の巣を掛けその上を歩む～将棋AIとヒト」

日文研所蔵井上哲次郎関係書簡の研究――国民国家の始発と終焉

(8)

（研究代表者　磯前 順一、苅田 真司）
〔共同研究者名〕
藤本 憲正、ゴウランガ・チャラン・プラダン、伊東 貴之、村島 健司、小田 龍哉、大村 一真、関口 寛、磯前 礼子、小倉 慈司、荻原 稔
〔海外共同研究員名〕
馬 冰、全 成坤、平野 克弥、宋 琦
〔研究発表〕
〈第1回研究会〉
2021年7月25日（オンライン開催）
磯前 順一「趣旨説明」
磯前 礼子「日文研所蔵井上哲次郎宛書簡DB整理のこれまでの経緯について」
コメント：小田 龍哉、村島 健司
全体討論
司会：苅田 真司
〈第2回研究会〉
2021年12月12日（オンライン開催）
磯前 順一「趣旨説明」
ゴウランガ・チャラン・プラダン、村島 健司「合評会「磯前順一

2022年3月11日（オンライン開催）

森岡 優紀「植民地の伝記史の一例として：閔妃、金玉均の伝記を中心に」

香西 豊子「近代日本におけるワクチン・血清の流通ネットワーク（の解明に向けて）」

光平 有希「精神科医療にみる日本近代音楽療法の諸相」

2022年3月12日（オンライン開催）

朴 潤栽「식민지시기 산파제도의 형성과 전개（植民地期産婆制度の形成と展開）」

通訳：陳 妍湲

鄭 駿永「植民主義教育批判としての民主主義？—呉天錫のコロンビア大学博士論文と民主主義教育論のグローバルな連環」

蜘蛛の巣上の無明：電子情報網生態系下の身心知の将来

（研究代表者　稲賀 繁美）

〔共同研究者名〕

フレデリック・クレインス、石川 肇、松木 裕美、光平 有希、根川 幸男、春藤 献一、陳 イジェ、二村 淳子、ゴウランガ・チャラン・プラダン、齊藤 紅葉、藤本 憲正、白石 恵理、森岡 優紀、今泉 宜子、飯窪 秀樹、岩井 茂樹、鵜戸 聡、江口 久美、大西 宏志、小倉 紀蔵、尾鍋 智子、加藤 善朗、君島 彩子、志賀 祐紀、申 昌浩、荘 千慧、滝澤 修身、竹村 民郎、多田 伊織、土居 浩、戸矢 理衣奈、範 麗雅、平倉 圭、堀 まどか、松村 薫子、村中 由美子、藤貫 裕、鋳物 美佳、片岡 真伊、松井 裕美、前川 志織

〔海外共同研究員名〕

デンニッツァ・ガブラコヴァ、近藤 貴子、ミツヨ・デルクール＝イトナガ

〔研究発表〕

〈第6回研究会〉

2021年5月8日（オンライン開催）

稲賀 繁美「研究会趣旨説明および今年度の予定」

朴 美貞（ゲストスピーカー）「漢陽を彩る外国の館 - 極東アジアの覇権—日清日露戦争前後に諸外国の大使館建築が建ち並ぶ空間の鬩ぎあい」

〈第7回研究会〉

2021年7月10日（オンライン開催）

前川 志織「明治後期から大正期にみる〈蜘蛛の巣〉としての視覚

「医学と美術の狭間」」
伊藤 謙、木森 圭一郎、五十里 翔吾（ゲストスピーカー）、武澤 里映（ゲストスピーカー）、布施 琳太郎（ゲストスピーカー）「セッション3「アートとテクノロジー」」

植民地帝国日本とグローバルな知の連環
（研究代表者　松田 利彦）
〔共同研究者名〕
劉 建輝、光平 有希、高 燕文、森岡 優紀、駒込 武、高野 麻子、福士 由紀、石原 あえか、石川 亮太、愼 蒼健、中生 勝美、李 昇燁、加藤 道也、やまだ あつし、通堂 あゆみ、米谷 匡史、加藤 茂生、香西 豊子、都留 俊太郎、長沢 一恵、周 雨霏
〔海外共同研究員名〕
顔 杏如、朴 潤載、陳 妊湲、鄭 駿永、廖 欽彬、単 荷君
〔研究発表〕
〈第3回研究会〉
2021年6月19日（オンライン開催）
石原 あえか「近代日本におけるドイツ林学の受容史から　ゲルマンの森から日本を経て台湾に続く緑のルート」
松田 利彦「水道と都市空間―大韓帝国期漢城における水道建設とCollbran & Bostwick」
石川 亮太「日本人による朝鮮の水産調査について」
廖 欽彬「植民地期台湾の精神病学の探究―中村譲を中心に」
〈第4回研究会〉
2021年8月27日（オンライン開催）
劉 士永（ゲストスピーカー）「日本占領地区における本草の研究」
やまだ あつし「台湾総督府の林業経営と欧米諸学」
顔 杏如「1920年代植民地台湾における「生活改善」の展開」
高 燕文「『大陸に生きる』：望月百合子の情熱」
〈第5回研究会〉
2021年12月12日（オンライン同時開催）
駒込 武「林 茂生『日本統治下台湾の公教育』（1929年）再読」
通堂 あゆみ「京城帝国大学理系教授の研究活動―予科を中心に」
長沢 一恵「近代鉱業の導入と技術者養成―ベルクアカデミー・フライベルクを目指した秋田鉱山専門学校を中心に―」
愼 蒼健「日本主義的医学論と生理学、臨床医学の連関」
〈第6回研究会〉

貴俊、前川 志織
〔海外共同研究員名〕
金 容儀、魯 成煥、杉田 智美、姜 姍、財吉拉胡
〔研究発表〕
〈第13回研究会〉
2021年4月24日（オンライン開催）
伊藤 謙「ヴァーチャル・ミュージアム試体験／ヴァーチャル・ミュージアム・ワーキンググループ作成」
「報告書　執筆内容の確認1」
「報告書　執筆内容の確認2」
2021年4月25日（オンライン開催）
「報告書　執筆内容の確認3」
〈第14回研究会〉
2021年8月9日（オンライン開催）
安井 眞奈美、ローレンス・マルソー「国際シンポジウム開催（2022年2月5, 6日）と展示、ヴァーチャル・ミュージアムの経過報告」
財吉拉胡「近代日本と内モンゴルの医療衛生―1911–1945」
安井 眞奈美「明治期における胎児の成長図―医療・美術・民間信仰の狭間で」

〈第15回研究会〉
2022年2月5日（オンライン開催）
安井 眞奈美、ローレンス・マルソー「展示「身体イメージの創造―感染症時代に考える伝承・医療・アート」展の紹介と共同研究会のまとめ」
東島 沙弥佳「失くしたしっぽは、「ひと」を知る鍵―文理両方の視点から考えるしっぽの喪失」
ディスカッション「共同研究会4年間を振り返る」
シンポジウム「身体イメージの創造 感染症時代に考える伝承・医療・アート」
2022年2月6日（オンライン開催）
安井 眞奈美、ローレンス・マルソー「身体イメージの創造―展示のねらい」
総合司会：波瀬山 祥子
ローレンス・マルソー、石上 阿希、板坂 則子、坂 知尋、鈴木 則子「セッション1「身体の表現」」
安井 眞奈美、稲田 健一、姜 姍、遠藤 誠之、倉田 誠「セッション2

国際的文化発信のなかの日本像―柳澤健の学際的研究―
（研究代表者　芝崎 厚士、楠 綾子）
〔共同研究者名〕
瀧井 一博、坪井 秀人、南 直子、稲賀 繁美、齊藤 紅葉、林 洋子、堀 まどか、西田 彰一、岩井 茂樹、渡辺 かよ子、酒井 健太郎、湯浅 拓也、山本 尚史、中村 信之、金子 聖仁、坂戸 勝、前川 志織
〈第1回研究会〉
2021年4月24日（オンライン開催）
瀧井 一博「研究会の趣旨」
芝崎 厚士、酒井 健太郎「柳澤健研究の現状と課題」
〈第2回研究会〉
2021年8月7日（オンライン開催）
林 洋子「柳澤健と藤田嗣治――二人がたどった「世界図絵」」
柳澤健著作「おせきはん」・「評論・交友篇」（『印度洋の黄昏』）を読む
〈第3回研究会〉
2021年12月18日（オンライン同時開催）
岩井 茂樹「柳澤健と日泰文化会館の戦後」
中村 信之「柳澤健と国際文化事業」
武田 知己（ゲストスピーカー）「「外務省外交」における「文化」の位置づけとその役割」
2021年12月19日（オンライン同時開催）
書評会「『葡萄牙のサラザール』『ジャン・ジョレス』を読む」
〈第4回研究会〉
2022年3月12日（オンライン開催）
西田 彰一「史料紹介：日文研所蔵柳澤健関係文書」

〈国際共同研究〉
身体イメージの想像と展開―医療・美術・民間信仰の狭間で
（研究代表者　安井 眞奈美、ローレンス・マルソー）
〔共同研究者名〕
石上 阿希、井上 章一、山田 奨治、光平 有希、川橋 範子、宋 丹丹、伊藤 謙、板坂 則子、中本 剛二、相田 満、蘆田 宏、今井 秀和、遠藤 誠之、越智 秀一、木森 圭一郎、倉田 誠、桑原 牧子、鈴木 則子、鈴木 由利子、高橋 淑子、田里 千代、波平 恵美子、松岡 悦子、宮崎 康子、エドワード・ドロット、阿部 奈緒美、木下 知威、二宮 美鈴、古川 綾子、坂 知尋、香西 豊子、稲田 健一、多田 伊織、木場

2021年11月20日（オンライン同時開催）
川島 浩平「明治、大正、昭和前期の日本におけるスポーツ、文化、ジェンダリング（gendering）」
佐伯 順子「LGBTQとスポーツ―メディア報道とダイバーシティ」
牛村 圭「『ストックホルムの旭日』後日談 -- アテネ大会（1896年）再考とOuting誌の意義」
〈第8回研究会〉
2022年3月27日（オンライン開催）
浜田 幸絵（ゲストスピーカー）「メディアとスポーツの関係史：代表する身体に注がれる視線とその行方」
中澤 篤史（ゲストスピーカー）「学校体育連盟の歴史社会学：運動部活動における競争と教育」

比較のなかの「東アジア」の「近世」―新しい世界史の認識と構想のために―
（研究代表者　伊東 貴之）
〔共同研究者名〕
坪井 秀人、磯田 道史、牛村 圭、フレデリック・クレインス、瀧井 一博、松田 利彦、劉 建輝、マルクス・リュッターマン、稲賀 繁美、青木 敦、浅見 洋二、新田 元規、石井 剛、宇佐美 文理、江藤 裕之、大久保 健晴、岡本 隆司、小倉 紀蔵、踊 共二、恩田 裕正、垣内 景子、上川 通夫、苅部 直、岸本 美緒、権 純哲、児島 恭子、小島 毅、佐々木 愛、佐野 真由子、澤井 啓一、周 圓、末木 文美士、杉山 清彦、関 智英、高橋 博巳、高柳 信夫、田口 由香、陳 捷、土田 健次郎、中 純夫、永冨 青地、野村 玄、林 文孝、福谷 彬、ジョン・ブリーン、前田 勉、松下 道信、松野 敏之、水口 拓寿、茂木 敏夫、山村 奨、横手 裕、李 暁東、渡邉 義浩、陶 徳民、竹村 民郎
〔海外共同研究員名〕
徐 興慶、趙 徳宇、新井 菜穂子、宋 琦
〈第1回研究会〉
2021年10月30日（オンライン同時開催）
伊東 貴之「共同研究の趣旨説明」
〈第2回研究会〉
2022年3月19日（オンライン開催）
青木 敦「宋代は“近世”か―経済中心南移論再考」
岡本 隆司「米中対立の起源？―帝制と憲法」

白幡 洋三郎、単 援朝、陳 継東、仲 万美子、松宮 貴之、森田 憲司、深尾 葉子、太田 梨紗子、南 誠、李 偉、高橋 博巳、村田 雄二郎、岸 陽子、安藤 潤一郎、陳 捷、劉 岸偉、戦 暁梅、平岡 隆二、李 長波、閻 小妹、張 競

〔海外共同研究員名〕

王 中忱、唐 権、孫 江、劉 序楓、孫 建軍、新井 菜穂子、王 志松

〔研究発表〕

〈第3回研究会〉

2021年6月26日（オンライン開催）

陳 力衛「出島からバタビヤへの日本知の伝播―メドハーストの役割を中心に」

王 志松「成島柳北と『花月新誌』―日本近代文学における漢詩文の文脈」

〈第4回研究会〉

2021年10月29日（オンライン開催）

劉 序楓「清朝宮廷旧蔵の長崎関係図絵と17–18世紀の日中関係」

孫 建軍「明治期における元長崎通事の翻訳」

〈第5回研究会〉

2022年1月29日（オンライン開催）

呂 順長「山本梅崖の漢学塾とその中国人留学生について」

青木 信夫「中国における文化遺産保護活動の15年」

文明としてのスポーツ／文化としてのスポーツ

（研究代表者　牛村 圭）

〔共同研究者名〕

フレデリック・クレインス、劉 建輝、光平 有希、田村 美由紀、増田 斎、井上 章一、稲賀 繁美、等松 春夫、川島 浩平、古田島 洋介、藤田 大誠、佐伯 順子、佐々木 浩雄、髙嶋 航、竹村 民郎、永井 久美子、堀 まどか、吉江 弘和、ジョン・ブリーン、西山 由理花

〔海外共同研究員名〕

徐 載坤、杉田 智美

〈第6回研究会〉

2021年10月30日（オンライン開催）

上林 功（ゲストスピーカー）「東京五輪の世界新は「競技場」と密接な関わり？ 新国立競技場の可能性を考える」

木下 秀明（ゲストスピーカー）「「体育」から「スポーツ」へ」

〈第7回研究会〉

共　同　研　究

共同研究（2021年4月1日～2022年3月31日）

〈重点共同研究〉

応永・永享期文化論―「北山文化」「東山文化」という大衆的歴史観のはざまで―

（研究代表者　大橋 直義、榎本 渉）

〔共同研究者名〕

高橋 悠介、橋本 正俊、猪瀬 千尋、今枝 杏子、大河内 智之、川口 成人、川本 慎自、小助川 元太、小山 順子、坂本 亮太、重田 みち、谷口 雄太、貫井 裕恵、山田 徹、芳澤 元、伊藤 伸江、伊藤 慎吾

〔海外共同研究員名〕

亀田 俊和

〔研究発表〕

〈第11回研究会〉

2022年3月25日（オンライン同時開催）

今枝 杏子「阿弥陀十一尊来迎図の成立について」

橋本 正俊「慶命説話の展開と相伝」

宇都宮 啓吾（ゲストスピーカー）「泉涌寺・良含と澄豪・恵鎮の流の周辺」

総合討論

司会：高橋 悠介

2022年3月26日（オンライン同時開催）

大橋 直義「国文学研究資料館蔵『霊厳寺縁起』と耕雲の方法」

佐々木 創（ゲストスピーカー）「明魏と伏見蔵光庵『両聖記』新出史料から考える」

髙岸 輝（ゲストスピーカー）「紀伊国の縁起絵巻と耕雲の役割」

ディスカッション

コメント：芳澤 元

司会：大橋 直義

近代東アジア文化史の再構築Ⅰ―19世紀の百年間を中心に

（研究代表者　劉 建輝）

〔共同研究者名〕

井上 章一、石川 肇、光平 有希、磯田 道史、稲垣 智恵、森岡 優紀、伊藤 謙、青木 信夫、上垣外 憲一、陳 力衛、王 宝平、小倉 紀蔵、

日文研　六十七号

二〇二二（令和四）年九月三〇日発行

編　集　荒木　浩、光平有希

発　行　大学共同利用機関法人　人間文化研究機構
　　国際日本文化研究センター

住所　〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町三丁目二番地

電話　（〇七五）三三五―二二二二

ファックス　（〇七五）三三五―二〇九一

ホームページ　https://www.nichibun.ac.jp

印刷　中西印刷株式会社

NICHIBUNKEN

ISSN 0915-0889